

超人ニコラ

江戸川乱歩



もうひとりの少年

東京の銀座に大きな店をもち、宝石王といわれている玉村^{たまむら}宝石店の主人、玉村銀之助^{ぎんのすけ}さんのすまいは、渋谷区^{しぶや}のしずかなやしき町にありました。

玉村さんの家庭には、奥さんと、ふたりの子どもがあります。ねえさんは光子^{みつこ}といつて高校一年生、弟は銀一^{ぎんいち}といつて中学一年生です。

あるとき、その玉村銀一君の身の上に、じつにふしぎなことがおこりました。それがこのお話の出発点になるのです。

その夜、玉村君は、松井君^{まつい}、吉田君^{よしだ}という、ふたりの友だちと、渋谷の大東映画館^{だいたう}で、日本ものスリラー映画を見ていました。

それは大東映画会社の東京撮影所で作られたもので、映画の中に、ときどき、東京の町があらわれるのです。

「あつ、渋谷駅だつ。ハチ公がいる。」

松井君が、おもわず口に出していいました。それ

はおっかけの場面で、にげる悪者、追跡する刑事、カメラがそれをズーツとおつていくのですが、そこへ駅前の人通りがうつり、ハチ公の銅像も、画面にはいったのです。

「あらつ、玉村君、きみがいるよ。ほら、ハチ公のむこうに、やあ、へんな顔して、笑つてらあ。」

吉田君が、とききような声をたてたので、まわりの観客が、みんなこちらをむいて、「シート。」といいました。

玉村君は、スクリーンの上の自分の姿を見て、へんな気がしました。ハチ公の銅像のうしろから、こちらをのぞいて、にやにや笑っている自分の顔、それが一メートルほどに、大きくうつっているのです。

それがうつつたのは、たった十秒ぐらいですが、たしかに自分の顔にちがひありません。玉村君は、ここにうつっているのは、いつのことだろうと考えってみました。

「おやつ、へんだな。ぼくは渋谷駅で、映画の口ケーシヨンなんか見たことは、一度もないぞ。」

いくら考えても、おもいだせません。知らないうちに、うつされてしまったのでしようか。まさか、口ケーションに気づかないはずはありません。

そのぼんは、うちにかえって、ベッドにはいつてからも、それが気になって、なかなかねむれませんでした。

あれは、自分によく似た少年かもしれないとおもいましたが、しかし、あんなにそっくりの少年が、ほかにあるうとは考えられないではありませんか。玉村君は、なんだか心配になってきました。自分とそっくりの人間が、どこかにいるとしたら、これは、おそろしいことです。

それから一週間ほどたった、ある日のこと、玉村君の心配したことが、じつに気味のわるい形で、あらわれてきました。

玉村君と松井君とは、明智探偵事務所あけちの小林少年こばやしを団長とする、少年探偵団の団員でした。ですから、ふたりはたいへんなかよいで、どこかへいくときは、たいてい、いっしょでした。

その松井君が、ある日、学校がおわってから、玉

村君をひきとめて、校庭のすみの土手にもたれて、へんなことをいじりました。

「玉村君、ぼく、すっかり見ちゃったよ。きみは秘密をもっているだろう。」

「秘密なんかないよ。どうしてさ。」

玉村君は、ふしんらしく、聞きかえました。

「きみのうちは、お金持ちだろう。お金持ちのくせに、スリなんかはたらくことはないじゃないか。」
「ええ、スリだつて？」

「そうだよ。ぼくはすっかり見ちゃったんだよ。」

「ぼくがかい？ ぼくがスリをやったつて？」

玉村君はびつくりしてしまいました。

「ほら、八幡さまはちまんの石がき……。あの石がきの石が、一つだけ、ぬけるようになってるんだ。きみはその石のうしろに、からの紙入れを、たくさん、かくしたじゃないか。」

「なにをいつているんだ。ぼくにはちつともわからないね。もつとくわしく話してごらん。」

玉村君は、あまりのいいがかりに、腹がたつて、

おもわず、つよい声でいいました。

「じゃあ、くわしく話すよ。」

松井君は、ゆうべのできごとを、はなしはじめました。

スリ少年

きのうは八幡さまのお祭りでした。

こんもりした林にかこまれた、その八幡さまは、玉村君のうちからも、松井君のうちからも、そんなに遠くないところにありました。

ゆうべ、松井君は、ただひとりで、その八幡さまの中をブラブラしていたのです。

五千平方メートルほどの、八幡さまの境内けいだいには、テントばりの見世物が二つと、オモチャ屋の店や、たべものの店が、いっぱいならんで、そのあいだを、おおぜいの人が、ゾロゾロ歩いていました。テントばりの見世物の一つは、おそろしく古めかしい

「クマむすめ」という、かたわものを十円で見せているのです。

「クマむすめ」というのは、二十歳ぐらいのむすめの、肩のへんいちめんに、まつ黒な、クマのような毛がはえているのです。まるで、人間とクマのあいの子みたいなので、「クマむすめ」とよんでいるのです。

いまだきめずらしい見世物なので、おおぜいの人物が、十円はらって、中へはいっていきます。

入口はテントの右のほう、出口は左のほうですが、松井君が見ていますと、その出口からゾロゾロと出てくる見物人の中に、玉村銀一君がまじっていたではありませんか。

「おやつ、玉村君は、こんなつまらない見世物を見ただな。」

とおかしくなつて、声をかけて、ひやかしてやろうと、そのほうへ、ちかづいていきました。そして、こちらへやつてくる玉村君と、バッタリ、であつたのです。ふたりは二メートルほどの近さで、顔を見あわせたのです。

ところが、ふしぎなことに、玉村少年は、松井君を見て、ニツコリともせず、知らん顔をして、すれちがって、いつてしまうではありませんか。

「ははん。あいつ、はずかしがっているんだな。わざと、知らん顔をして、にげだしたんだな。よしつ、そんならこつちは、どこまでも尾行^{びこう}してやるぞ。」

少年探偵団で練習していますから、尾行はお手のものです。松井君は、玉村君にさとられぬように、あとをつけはじめました。

玉村君は、いつまでも八幡さまから出ないで、人ごみの中を、あちこちしています。わざと人だかりの中へ、もぐりこんでいくのです。そこを出ると、また、つぎの人だかりへもぐりこみます。玉村君は、よっぽど人ごみがすきらしいのです。

一時間ほど、そんなことをくりかえしていましたが、やっと人ごみにもあきたのか、玉村君は八幡さまを出て、外のくらい道をかえっていきます。

松井君は、あくまで尾行をつづけました。

玉村君は、八幡さまの外がわの長い石がきの半分ぐらいのところまでくると、そこで立ちどまって、

キヨロキヨロと、あたりを見まわしました。だれか見ていやしいかと、気をくばっているらしいのです。

松井君は、すばやく電柱のかげに、身をかくしました。ほかに人通りありませんので、玉村君は安心したように、石がきのそばによつて、そこにしゃがんでしまいました。

そして、石がきの一つの石に手をかけると、グーツとひつぱりだしました。その石だけが、ぬけるようになっていたのです。

玉村君は石をぬきとつたあとの穴に、手をいれて、なにかやっていました。また石をもとのとおりにはめこむと、そのまま、立ちあがって、むこうへ歩いていきます。

松井君は、あの石のおくに、なにかかくしたにちがいないとおもいました。そこで、玉村君の尾行をあきらめて石のおくをしらべてみることにしました。

松井君は、あたりを見まわして、人通りがないのをたしかめると、石がきのそばによつて、さっきの

石に両手をかけ、グツとひつぱりました。石はなんの苦もなく、ズルズルとぬけてきます。

石をぬきとると、そのあとの穴に、手をいれて、さぐってみました。

ある、ある。一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、それはみんな紙入れや、がまぐちでした。あけてみると、どれも中はからっぽです。

松井君は、あきれかえってしまいました。玉村少年は、人ごみの中で、これらの紙入れや、がまぐちを、スリとつたのです。そして、中のお金をとりだして、からの紙入れなんかを、この石がきにかくしたのです。

ふつうなら、紙入れなんかは、どこかへすてしまうのですが、用心ぶかく、からの紙入れまでかくすというのは、よつぼどなれたやつです。スリの名人といつてもいいでしょう。

ああ、親友の玉村銀一君が、スリの名人だったなんて。あまりのことに、松井君は、あいた口がふさがりません。

あのお金持ちの玉村君が、わずかのお金のため

に、スリをはたらくなんてまったく考えられないことです。これにはなにか、わけがあるにちがいない。おもいきつて、玉村君にきいてみよう。

松井君は、そう決心をしたので、校庭のすみで、さつきのように、玉村君を、といつめたのです。

窓の顔

玉村君は、すこしもおぼえのないことでした。

「ねえ、松井君、ぼくとまったくおなじ顔のやつが、どつかにいるんだよ。あの映画のハチ公のそばに立っていたのも、けつしてぼくじゃない。また、きみの見たスリの少年も、むろん、ぼくじゃない。きみでさえ、まちがえるほど、ぼくとそっくりのやつが、いるのにちがいない。ぼくはなんだか、心配だよ。いまのところは、そいつは、ぼくとなんのかんけいもないけれども、そいつがなにかわるいことをして、その罪を、ぼくにきせようとすれば、きせ

られるんだからね。」

玉村君はそういつて、考えこんでしまいました。

「まさか……。」

松井君は、玉村君をげんきづけるようにいいました。が、心の中では、玉村君の心配は、むりではないとおもっているのです。

それから、しばらく話したあとで、ふたりはわかれて、それぞれのうちへかえりましたが、それは、学校がひけて、一時間もたつたころでした。

玉村君がうちにかえつてみますと、そこにはじつにおそろしいことが、まぢかまえていたのです。

「ただいま。」といつて、玄関げんかんにはいると、ちょうどそこに、ねえさんの光子さんが立っていました。

「あらつ、またかえつてきたの？」

「えつ、またつて？」

「だつて、もうさつき学校からかえつて、お部屋でおやつをたべたじやありませんか。わたしがコーヒーとお菓子をもつてつてあげたら、うまいうまいつて、たべたじやないの。いつのまに、外へ出ていったのよ。そして、学校の道具なんかもつて、ま

たかえつてくるなんて、どうかしてるわ。」

それをきくと、玉村銀一君は、ゾーツとしました。

「ねえさん、ぼくをかつぐんじやないだろうね。」

銀一君は、しんけんな顔で、ねえさんをにらみつけました。

「おおこわい。なんてこわい顔するの？ 銀ちゃんをかついだつて、しようがないわ。たしかに、さつきかえつたから、かえつたつていうのよ。」

銀一君は、それにはこたえず、くつをぬぐのももどかしく、おそろしいいきおいで、自分の勉強部屋へ、かけていきました。

ドアをあけて、とびこんでみると、ああ、やつぱり、そこには、机の上にならなつた菓子ざらとコーヒーの茶わんがのつていたではありませんか。「あいつがきたのだ。そして、ぼくがかえつたのを知ると、大いそぎで、窓からにげだしたのだ。」

ここからにげたといわぬばかりに、窓のガラス戸が、あけはなしになつていました。銀一君は、いそいで、窓の外をのぞきますと、その地面に、大きな足あとが、いくつものこつているではありません

か。

しらべてみると、本箱の本のおきかたが、かわつています。あいつが本を動かしたのでしよう。机のひきだしをあけてみると、どのひきだしも、みんな、あいつがいじつたらしく、紙などのかさねかたが、ちがっています。

じぶんとそっくりのやつが、うちへはいってきて、おやつをたべたり、本箱や、机のひきだしを、かきまわしたかとおもうと、なんともいえない、いやあな気がしました。

すぐに茶の間へとんでいって、おかあさんに、このことを知らせましたが、あんまりへんなことなので、おかあさんも、どうしていいかわかりません。おとうさんが、お店からおかえりになつたら、よく相談しましょうと、おっしゃるばかりでした。

しばらくして、銀一君は、勉強部屋にかえつて本を読んでいた。もう夕ぐれで、庭はうすぐらくなっています。おやつ、あれはなんでしよう。

本を読んでいる目のすみに、チラッと、動いたものがあります。窓の外でなにかが動いたのです。

ハツとして、そのほうを見ると、さつきしめた窓ガラスに、自分の顔がうつっていました。

しかし、なんだか角度がへんです。あんなところに、ぼくの顔がうつるかしら……あつ、もしかしたら！ 銀一君はギョツとして立ちあがると、窓ガラスへ近づいていきました。

やつぱりそうでした。ガラスにうつっているのではなくて、ガラスのむこうがわに、自分の顔があるのです。自分の顔ではない、自分とそっくりのやつが、ガラスの外から、のぞいていたのです。

十秒ほど、ガラスをへだてて、まったくおなじ二つの顔が、じつとにらみあっていました。じつに、なんともいえない、へんてこな光景でした。

ニコラ博士

十秒ほどにらみあつたあとで、窓のむこうの顔は、パツとガラスをはなれて、庭の立ち木のあいだ

に、にげこんでしまいました。

銀一君は、少年探偵団員だけあつて、こういうときには勇かんです。うちの人に知らせるひまもないので、そのまま、窓からとびだすと、くつもはかないで、自分とそっくりの少年のあとを、おいました。

あいては、うらのコンクリートべいを、よじのぼつて、外の道路へ、とびおりたようです。銀一君も、そのへいをのりこえました。

見ると、二十メートルほどさきを、あいつが大いそぎで、あるいていきます。うしろ姿は、銀一君と、まったくおなじ服装です。

こちらは、しずかに、へいからすべりおちて、追跡をはじめました。ほとんどくらくらくなっているの

で、あいてにさとられる心配はありません。それにしても、なんとというふしぎな追跡でしょう。まったくおなじ顔の、おなじ服装の、ふたりの少年が、二―三十メートルをへだてて、トット、トットと、いそぎ足に、歩いているのです。

さびしい町から、さびしい町と、あるいているう

ちに、いつのまにか、あの八幡さまの石がきのところにきていました。

あいての少年は、石がきをとおりすぎて、八幡さまの林の中へはいつていきます。ゆうべでお祭りはすんだので、林の中はまっくらで、人っ子ひとりいません。

銀一君も、すこしおくれて、八幡さまの中へ、はいつていきましたが、くらいので、なにがなんだかわかりません。あの少年はどこへいったのか、いくらさがしても姿が見えないのです。

むこうにボーツとひかつたものがあります。八幡さまの社殿しゃでんの前に、うすぐらい常夜灯じょうやとうが立っているのです。

その社殿のえんがわのようなところに、みょうな人間が、こしかけていました。はでなしの背広をきた老人です。

老人は白いかみの毛をモジャモジャにして、長い白ひげを胸の前にたらしめています。大きなめがねをかけていて、それが常夜灯の光を反射して、キラキラひかっているのです。

こんなまっくらな中で、社殿にこしかけているなんて、あやしい老人です。銀一君は、気味がわるくなつて、にげだそうかと思いましたが、にげるのもざんねんです。勇気をだして、ぎやくに、こちらからちかづいていきましました。

「おじいさん、ぼくとおんなじ服をきた、おんなじ顔の子どもが、ここをとおらなかつたですか。」

おもいきつて、はなしかけてみました。すると、老人は、こしかけたまま、身動きもしないで、にやりと笑いました。

「おお、かんしん、かんしん、きみはなかなか勇氣がある。きみとおんなじ顔をした子ども、あれはきみの分身じゃよ。」

地の底から、ひびいてくるような、いんきな声です。

「分身つて、なんですか？」

「きみが、ふたりになつたのじゃ。ひとりの子どもが、ふたりにわかれたんじゃよ。」

「どうして、そんなことができるのですか。」

「わしがそうしたのじゃよ。ハハハハハハ。」

老人はぶきみに笑いました。やつぱり、あやしいやつです。

「おじいさんはだれですか。」

「わしはニコラ博士というものじゃ。」

「ニコラ博士？　じゃあ、日本人ではないのですか。」

「わしは十九世紀のなかごろに、ドイツで生まれた。だが、わしはドイツ人ではない。世界人じゃ。イギリスにも、フランスにも、ロシアにも、中国にも、アメリカにもいたことがある。そして、いたるところで、ふしぎをあらわして歩くのじゃ。わしは大魔術師じゃ、スーパーマンじゃ。わしにできないことはなにもない。神通力じんつうりきをもっているのじゃ。わしひとりの力で、この世界を、まったくちがつたものにすることができる。そういう神通力をな。ウフフフフ。」

老人はそういつて、またしても、地の底からのような、いんきな声で、笑うのでした。

地底の牢獄ろうごく

「十九世紀のなかばというと、一八五〇年ごろですね。」

銀一君は、びつくりして、聞きかえしました。

「そうじゃ。わしが生まれたのは一八四八年だよ。」

銀一君は、しばらく、指をおつて、かぞえていましたが、あつとおどろいて、おもわず大きな声を出しました。

「じゃあ、おじいさんは、百十四歳ですね。」

「ウフフフフ、おどろくことはない。わしは、これからまだ、百年も二百年も生きるつもりじゃよ。わしは、あたりまえの人間ではない。スーパーマンだ。魔法つかいだ。」

さて、玉村銀一君。これから、わしがおもしろいところに、つれていってやる。そこにいけば、どうして、きみとそっくりの少年が、あらわれたか、その秘密が、わかるのじゃよ。さあ、わしといっしょに、くるがいい。」

怪老人ニコラ博士は、ちやんと銀一君の名まえを知っていました。玉村家にたいして、なにかおそろしいことを、たくらんでいるのかもしれない。

ニコラ博士は、社殿のえんがわからおりると、銀一君の手をとつて神社のうらてのほうへ、歩いてきました。

森を出はずれると、さびしい、広い道があつて、そこに、りっぱな自動車がとまっていました。

銀一君は、こんな自動車で、どこへつれていかれるかわからないと思うと、こわくなつてきました。

「ぼく、うちにかえります。」

そういうと、いきなり、にぎられていた手を、ふりはなして、にげだそうとしました。

「どっこい、そうはいかないぞ。きみはもう、わしのとりこなのじゃ。」

白ひげのニコラ博士は、すばやく銀一君をつかまえて、自動車の中におしこもうとしました。

そこで百十四歳の老人と、十三歳の少年との、ふしぎなとつくみあい、はじまったのです。ふつうならば、百歳をこえた老人のほう、まけてしま

はずですが、超人ニコラ博士は、おそろしくつよくて、銀一君は、とても勝てないのです。

ニコラ博士は、銀一君を、身動きもできないように、だきしめて、ポケットから、大きなハンカチをとりだし、それをまるめて、銀一君の口の中におしこみました。

もう声をたてることもできません。そのまま自動車の中に、おしこまれてしまいました。すると、ハンドルをにぎつて、まちかまえていた運転手が、すぐに車を出発させるのでした。

二十分ほど走ると、さびしい町の、石のへいにかこまれた洋館の前につききました。

ニコラ博士は、銀一君の手をひっぱつて、その門の中にはいつていきます。まるで鉄のようにつよい手です。とてもにげることはできません。

洋館にはいると、広い廊下をとおつて、地下室への階段をおりていきました。

地下室は、三十平方メートルほどの物置部屋で

す。ふるいすやテーブルや、いろいろな木の箱などが、ゴタゴタとつかさねてあります。

「ここは、あたりまえの物置きじや。地下室は、これでおしまいのように見えるじやろう。ところが、このおくに、秘密の部屋があるのじや。まさか地下室のおくに、もうひとつ地下室があるなんて、だれも考えないからね。たとえ、家さがしをされても、だいじようぶなのだ。ほら、ここに秘密のドアがある。」

ニコラ博士は、そういつて、コンクリートの壁の、かくしボタンをおしました。すると、目の前の壁が、スツと、音もなく、むこうにひらいていつて、そこに、四角な穴ができました。

その穴をくぐつて、廊下のようなところをすこしいきますと、両がわに、鉄棒のはまった、動物園のおりのような部屋がならんでいました。

ニコラ博士は銀一君の口から、ハンカチのさるぐつわを、とりだしてから、そのおりのような部屋のドアをかぎでひらいて、銀一君を中におしこみ、ドアをしめて、またかぎをかけてしまいました。

「ここで、ゆつくりしているがいい。ベッドもあるし、便器もおいてある。食事も、なるべくおいしい

ものを三度三度、はこぼせるよ。じゃあ、またくるからね。」

ニコラ博士は、そういうのこして、どこかへたちさつてしまいました。

地底の牢獄です。銀一君は、おそろしいとりこになつてしまったのです。いつになつたら、ここを出られるのでしょうか。ひよつとしたら、一生がい、出られないのではないのでしょうか。

「おい、きみ、おい、きみ。」

どこからか、人の声がかきこえてきました。前の廊下の、むこうからのようです。

銀一君は、おりの鉄棒につかまつて、そのほうを見ました。廊下のてんじょうに、うすぐらい電灯がついているだけです。おりの中は、ぼんやりとしか見えません。むこうがわのおりの中に、なにかに動いているものがあります。

じつと見つめていますと、だんだん目がなれて、その姿が、はつきりしてきました。それは、銀一君よりは二つ三つ年上らしい少年でした。

「おい、きみ、わかるかい。ぼくだよ。きみもぼく

と、おんなじめに、あつたらしいね。きみのかえ玉が、きみのうちにはいり、ほんもののきみは、ここにどじこめられたんだろう。」

「そうですよ。きみもそうなんですか。」

「うん、ぼくのうちには、いま、ぼくのかえ玉がいるんだ。おとうさんも、おかあさんも、かえ玉とは気がつかない。それほど、ぼくとそっくりなんだ。ニコラ博士は、おそろしいスーパーマンだよ。人間の顔を、どんなにでも、かえることができるんだ。ぼくとそっくりの人間をつくることもできるし、また、ぼくを、まるでちがつた顔に、かえてしまうことだつてできるんだ。で、きみは、なんていうの？きみのうちは、なにをやつてるの？」

「ぼく、玉村銀一。おとうさんは玉村宝石店をやっているのです。」

「あつ、そうか。あの有名な宝石王だね。ぼくは白井保しろいたもつ。ぼくのうちは、銀座の白井美術店だよ。」

「知つてます。あの大きな美術店でしょう、仏像やなんか、たくさんおいてある。」

「そうだよ。きみ、わかるかい。ニコラ博士は、宝

石や美術品をねらっているんだぜ。そして、まず、ぼくたちのかえ玉をつくって、人間の入れかえをやったんだ。このつぎに、あいつがなにをやるか、ぼくには、わかっているよ。ああ、おそろしいことだ。はやくだれかに知らせなければ、とりかえしのつかないことになる。」

白井保少年は、おりの鉄棒にしがみついて、じだんだをふまんばかりでした。

こじきむすめ

それから二日ほどのちの午後、玉村さんのうちでは、おとうさんの銀之助さんは銀座のお店へ、おかあさんは麴町こうじまちの親類へおでかけになって、高校一年の光子さんと、銀一君のふたりが、書生さんや、女中さんたちといっしょに、おるす番をしていました。

光子さんと銀一君は光子さんの部屋で、おやつ

お菓子をたべおわったところですよ。

「おねえさん、それじゃあ、ぼく、じぶんの部屋で、宿題をやるからね。」

銀一君は、そういつて、部屋を出ていきました。なんだか、へんですね。銀一君は、あの地底の牢獄から、にげだしてきたのでしょうか。そんなにやすやすと、にげられるはずありません。

ひよつとしたら、いまうちにいる銀一君は、にせもののほうではないのでしょうか。まったくおなじ顔をしているので、おとうさんも、おかあさんも、おねえさんも、すっかりだまされてしまって、にせものを、ほんとうの銀一君と、しんじているのではないのでしょうか。

銀一君がいつてしまうと、光子さんは、机の前のいすにかけたまま、窓のほうをむいて、広い庭を、ながめていました。

すると、庭の木のしげみのおくから、みょうな人間が、あらわれてきたではありませんか。

女のこじきです。年は光子さんとおなじ十六ぐらいい見えます。かみの毛はモジャモジャになっ

て、ひたいにかぶさり、服はポロポロにやぶけて、肩から、腰から、たくさんひもがぶらさがっているように見えます。それに、くつ下も、くつものはかない、どろまみれの足です。

そのこじきむすめが、じつと光子さんを見つめて、こちらにちかづいてくるのです。

ふつうのむすめさんなら、こんなものを見たら、おくへにげこんでしまったでしょうが、光子さんは、にげません。光子さんは、たいへん、なさけぶかいたちで、かわいそうな人を見ると、だまつてはいられないのです。

あるとき、道ばたにすわっている、おばあさんのこじきを見ると、つくったばかりの外とうをぬいで、そのこじきにきせかけたまま、さつさとかえってきたことがあります。

また、あるときは、子どものかじきを、自動車の中にひろいあげて、うちにつれてかえり、おかあさんに、そのこじきの子を、うちにおいてくださいと、たのんだこともあります。

光子さんは、そんなふうになみはずれた、なさ

けぶかい心をもったおじょうさんでした。

ですから、庭にあらわれた、こじきむすめを見ても、にげだすどころか、ちかづいてきたら、なにかしんせつなことをかけてやろうと、じつとまぢかまえているのです。

こじきは、やがて、窓の下までくると、そこに立つたまま、ジロジロと光子さんをながめながら、みかけによらぬ、きれいな声でいいました。

「おじょうさん、なぜにげないの？ あたしがこわくないの？」

光子さんは、それをきくと、この子はひがんでいなのだ、だから、こんな、ひにくなことをいうのだと、かなしく思いました。そこで、できるだけ、やさしい声で、たずねてみました。

「あんた、どこから、はいつてきたの？」

「門からよ。だって、ねるところがなければ、どこにだって、はいるわ。ゆうべは、お庭のすみの物置小屋でねたの。」

あんがい、ちゃんとしたことをつかっている。

このむすめは、生まれつきのこじきではないらしい

と、光子さんは考えました。

「おなかですいているでしょう。あんだ、おとうさんや、おかあさんは？」

「なんにもないの。みなし子よ。そして、おなかのほうは、おさつしのとおり、ペコペコだわ。」

「じゃあね。人に知れるといけないから、この窓から、はいっていらつしやい。いま、わたしが、なか、たべるもの、さがしてきてあげるわ。」

「だれも、きやしない？」

「だいじょうぶよ。このうちには、いま、わたしと弟きりで、あとは書生や女中さんばかりよ。この部屋には、だれもこないわ。」

それをきくと、こじきむすめは、窓をのりこえて、はいってきました。光子さんは、こじきをいすにかけさせておいて、部屋を出ていきましたが、やがて、クツキーのカンと、牛乳のびんを二つと、コップをもって、かえつてくると、それをこじきの前のテーブルにおき、

「さあ、おあがりなさい。」

とすすめるのでした。

こじきは、よつぽど、おなかですいていたとみえて、クツキーをわしづかみにして、口にほおぼりましたが、そのとき、ひたいたれてきたかみの毛を、うるさそうにかきあげたので、はじめて、こじきの顔が、はつきり見えました。

ああ、なんて美しいこじきでしょう。きたない服にひきかえて、顔だけは、すこしもよれていないのです。色白のふつくらとしたほお、パッチリとした、美しい目、赤いくちびる。

「まあ、あんだ……。」

光子さんは、さげぶようにいって、思わず立ちあがると、ドアのほうへ、にげだしそうにしました。

光子さんは、ひどくおどろいたのです。こじきが、美しい顔をしていたためばかりではありません。もつと、びつくりすることがあったのです。

すると、こじきむすめは、ニッコリ笑って、

「ああ、うれしい。おじょうさんにも、やつぱり、そう見えるの？ あたし、ほんとうにうれしいわ。こんなきたないこじきの子が、このりっぱなおやしきのおじょうさんと、そっくりだなんて。」

ほんとうに、そっくりでした。一方は、ちゃんといたかみの毛、きれいな服、一方はモジャモジャ頭、ポロポロの服、そのちがいをべつにすると、ふたりは、背の高さから、肉つきから、顔かたちまで、まるでふたごのように、おそろしいほど、よくにているのです。

「あたし、もうずっと前から、おじょうさんと、あたしと、ふたごのように、よくにていることを知っていました。もし、あのおじょうさんと、ひとことでも、お話ができたらと、もうそれが、あたしの、一生ののぞみだったのです。いま、そののぞみがかなって、あたし、こんなうれしいことはありませんわ。」

こじきむすめは涙ぐんでいました。

「まあ、こんなふしぎなことって、あるものでしょうか。」

光子さんは、それまでよりも、十倍も、なさげぶかい心になって、ため息をつきながらいうのでした。

まるでたちばのちがう、このふたりのむすめは、

たちまち、きょうだいのように、なかよしになってしまいました。

光子さんがたずねますと、こじきむすめは、あわれな身のうえ話をしました。光子さんは、涙をこぼして、それをきいていましたが、話しているうちに、ふたりは、顔ばかりでなく、気質まで、よくにていることが、わかっってきました。

しめつばい身のうえ話がすむと、ふたりは、だんだん快活かいかつになって、笑い声をたてながら、話しあっていました。やがて、光子さんは、こんなことをいいますのでした。

「ああ、いいことを思いついたわ。まあ、すてきだわ。ねえ、あんた、わたし、いま、それはおもしろい遊びを考えついたのよ。」

「あら、おじょうさんと、あたしとが、なにかしてあそぶんですの?」

こじきむすめは、びつくりして、ききかえます。

「ええ、そうよ。わたしね。子どものとき『乞食王子』って本を、よんだことがあるの。それで思っていたのよ。あのね、わたしがあんたになるの。そし

て、あんたがわたしになるの。わかつて？ つまりね、あんたとわたしが、服やなんか、すつかり、とりかえてしまうのよ。ふたりは、顔がおんなじでしよう。だから、服をかえて、かみの毛のくせをかえれば、あんたがわたしになり、わたしがあんたになれるのよ。」

この思いつきも、半分は光子さんのなさけぶかい心から出ているのでした。かわいそうなこじきむすめに、ひとときでも、宝石王の令嬢になった夢を見せてやりたいと思ったのです。

「まあ、あたしと、おじょうさんと、いれかわるの？ ワー、すてき。あたしに、そのきれいな服をきせてくださるのね。」

こじきむすめは、もうむちゆうになっていました。

光子さんは、洗面器にお湯をいれて、てぬぐいと、足ふきをもってきて、まず、こじきの顔や手を、それから足を、きれいにふいてやりました。そして、かみの毛を、ていねいになでつけてやり、服をとりかえました。

きたないこじきむすめが、たちまち、美しいおじょうさんにかわつてしまいました。

光子さんは、こじきを三面鏡の前に、つれていきました。

「どう、さつきまでのわたしと、そっくりでしょう。」

「ワーツ、これがあたし？ほんとかしら……。」
こじきむすめは、そういつて、じぶんのほおをつねつてみるのでした。

つぎは光子さんの番でした。きたないポロポロの服をきて、かみの毛を、指でかきまわして、モジャモジャにして、鏡をのぞきこみました。

「あら、そんな美しいこじきつて、ないわ。顔に、まゆずみを、うすくぬつてあげましょうか。そうすれば、ほんとうのこじきに見えるわ。」

こじきむすめは、ちようしにのつて、そんなことまでいいただきましたが、光子さんは、かえつておもしろがつて、学校の仮装会かそうかいのことを思いだしながら、こじきむすめのいうままに、顔いちめん、まゆずみをぬらせるのでした。

人間いれかえ

「こつちへいらつしやい。ふたりならんで、鏡の前に立ってみるのよ。」

こじき姿の光子さんが、光子さんの服をきたこじきむすめの手をとって、鏡の前につれていきました。

「あらつ、あんた、あたしとそつくりだわ。そして、あたしは、あんたとそつくりね。だれにも見わけられないわ。」

「わたし、うれしいですわ。こんなきれいなおじょうさんになれたんですもの。でも、いけませんわ。だれかに見られるとたいへんですわ。はやく服をとるかえましようよ。」

「なあに、いいのよ。みんなをびつくりさせてやりたいわ。ね、あんた、もつとぐつとおすまじしてね、あちらへいって、書生や女中に、なにかいって

ごらん。お紅茶をもつてくるようにいつけてもいいわ。そして、だれにもうたがわれないうで、ここにかえつてきたら、そうね、なにかごほうびをあげるわ。おこづかいをあげてもいいわ。」

光子さんは、このいたずらが、たのしくてたまらないという、顔つきです。

「だって、わたし、こわいわ。きつとみつかりますわ。」

光子さんとそつくりのこじきむすめは、なかなか決心がつかないらしいのです。

「みつかるもんですか。ほら、鏡をごらんなさい。ね、あんた、あたしとそつくりだわ。だいじょうぶよ。さあ、いっていらつしやい！」

光子さんは、そういって、こじきむすめを、ドアのところにつれていくと、グツと、廊下におしだしてしまいました。にせものの光子さんは、しかたなく、廊下を歩いていきます。

一つかどをまがると、むこうから書生がやってくるのに、パツタリでいました。こじきむすめは、びつくりして、にげだしたでしょうか。

いや、いや、そのとき、じつにおそろしいことがおこったのです。ほんとうの光子さんが、まるで考えてもいなかったことが、おこったのです。こじきむすめは、いきなり、書生のそばにかけよりました。そして、こんなことをきけんなのです。

「はやくきて！ たいへんなのよ。あたしの部屋に、こじきの子が、はいつているのよ。はやく、あれをおいだしておくれ。」

光子さんになりましたこじきむすめが、とほうもないことを、いいたしたのです。

書生は、すこしもうたがわず、このことばをまにうけてしまいました。

「えっ、こじきが？ おじょうさんのお部屋に？ とんでもないやつだ。ここにまっつていらっしやい。すぐにつかみだしてやりますから。」

書生は、いきなり、かけだして、光子さんの部屋に行つてみますと、黒い顔をした、きたないこじきが、鏡の前にこしかけて、じぶんの顔をうつしなから、にやにや笑っているではありませんか。

「いらっ、きさま、どうしてここにはいつてきたん

だ。はやく出ていけ。ぐずぐずしていると、警察にひきわたすぞっ。」

いくらどなつても、あいては、へいきな顔をして、こんなことをいうのです。

「あらっ、なにをそんなにおこっているの？ ちよつといたずらをしてみたのよ。おこることはないわ。」

書生は、光子さんのことばのいみを、とりちがえました。

「ばかつ、ちよつといたずらに、部屋の中にはいられてたまるかつ。さあ出る。出なければ、こうしてやるぞっ。」

書生は、こじきむすめ（ほんとうの光子さん）の首すじをつかんで、窓のそばにつれていき、いきなり、窓の外に、つきおとしてしまいました。

こじきむすめは、窓の下にころがつて、からだじゆう、砂まみれになりました。

「青木あおきつ、なにをするの。あたしをだれだと思つているの。」

光子さんは、やつとおきあがると、窓からのぞいている書生に、せいっぱいの声で、どなりつけま

した。青木というのは、書生の名です。

「なまいきいくなつ。だれとも思っていない。こじきだと思つているよ。さつきと出ていけ。出ていかないと、もつと、いたいめをみせてやるぞつ。」

書生は、いまにも、窓からとびだしてきそうなきおいです。

光子さんは、ただどなつていたつてしかたがない、わけをはなそうと思ひました。

「ねえ、青木さん。あんたが思ひがちがいをするのも、むりはないわ。でもあたしは光子なのよ。庭からはいつてきた、こじきむすめと、服のとりかえつこをしたのよ。」

それをきくと、書生は、声をたてて笑ひました。「アハハハハハ、なにをつまらないことをいつてゐる。あつ、ちようどいい、光子さんがこられた。ねえ、おじようさん、こいつ、あなたと服をとりかえたんだといつてますよ。」

すると、窓に、二つの顔があらわれました。にせの光子さんと、それから、弟の銀一君です。

「あつ、あんた、そこにいたの。はやく、あたしを

たすけてちようだい。あんたがあたしの服をきて、あたしがあんたの服をきてゐるんだわね。」

それをきくと、光子さんにばけたこじきむすめは、目をまんまるにして、わざとおどろいてみせるのです。

「まあ、おそろしい。なんといういいがかりをつけるのでしょうか。そんなばかなことを、だれが信用するものですか。青木さん、はやくこのこじきを、門の外へ、ほうりだして。」

こじき姿の光子さんは、びつくりしてしまいました。

「あらつ、なにをいうの。あんたこそ、おそろしい人だわ。ねえ、銀ちゃん、あんたはわかつてくれるわね。ほら、おねえさんの光子よ。」

弟の銀一君によびかけて、顔を窓のほうへつきだしましたが、銀一君も、とりあつてくれません。

「光子ねえさんはここにゐるよ。そんなきたないねえさんなんてあるもんか。おまえなんか、はやく、どつかへいつちまえつ。」

たのみの綱つなが、きればてました。

ああ、とんだことをしてしまった。あんな気まぐれをおこして、服のとりかえっこをしたばかりに、おそろしいめにあわなければならぬ。光子さんは後悔しましたが、いまさらおつつきませぬ。

あつ、書生がえんがわからまわつて、庭に出てきました。おそろしい顔をしています。

「さあ、門の外にでるんだ。そして、おまえのこじき小屋にかえるんだ。」

そういつて光子さんのえり首をつかむと、グングン門のほうへおしていくのです。

おとうさんは銀座のお店です。おかあさんは麴町の親戚におでかけです。もうたすけをもとめる人もありません。

それにしても、弟の銀一が、どうして、あたしを見わけてくれなかったのだらうと、光子さんはふしぎに思いました。

しかし、読者諸君はごぞんじです。これは銀一君とそつくりの顔をした、にせものです。ほんとうの銀一君は、ニコラ博士という白ひげのじいさんにつれていかれ、地下室にとじこめられているのです。

ああ、これはどうしたことでしょう。怪人ニコラ博士は、いったい、なにをたくらんでいるのでしょうか。まず銀一君をにせものといれかえ、いまはまた、光子さんをいれかえたのです。おそろしい計画は、つぎつぎと、なしとげられていくようにみえます。

「さあ、はやく、あっちへいけつ。」

書生は、門の鉄のとびらをひらいて、光子さんを外につきとばし、そのまま、パタンととびらをしめて、うちにはいつてしまいました。

人形紳士

光子さんは、書生につきとばされたとき、ひざを強くうったので、いたさに、そこにうつぶしたまま、シクシクと泣いていました。

ああ、「乞食王子」のまねなんかしなければよかったです。あんな小説をおぼえていたばかりに、とんだ

ことになってしまった。あたしは、どうすればいいんだろう。

くよくよと、おなじことを、くりかえし、考えているうちに、ふと気がつくど、なにかおしりをつつくものがあります。

おどろいて、うつむいていた顔をあげてみますと、いつのまにか、六人ほどの子どもたちにとりかこまれていました。

近くのいたずら小僧どもが、きたないじきむすめがたおれているのを見て、あつまってきたのです。その中のひとりが棒きれをもって、光子さんのおしりをつつついたのです。

光子さんは、その子をにらみつけて、おきあがりました。すると、子どもたちは、ワーツといって、むこうへにげていきます。

もうこんなところに、たおれているわけにはいきません。子どもたちが、またいたずらをするにきまつているからです。

光子さんは、ひぎのいたみをこらえて、たちあがり、トボトボと、歩きだしました。

「ワイ、ワイ、ばつちいおねえちゃんよう。どこへいくんだよう。」

あとから、子どもたちがゾロゾロついてきます。ふりむいて、こわい顔で、にらみつけますと、子どもたちは、ワーツといって、にげますが、しばらくすると、また、ちかづいてきて、下品なことばで、からかうのです。

光子さんは、ワーツと声をあげて、泣きだしたくなりしました。しかし、じつところらえて、くちびるをかみしめて、トットと、急ぎ足に歩きました。

町かどを、まがりまがり、四百メートルも歩くと、いつのまにか、子どもたちは、あとをつけてこなくなりしました。

ああ、たすかっただと思いつながら、バスの停留所のほうへ歩いていきます。いまから銀座のお店にいう。そして、おとうさんにわけを話して、たすけてもらおう。そのほかにてだてはない。光子さんは、そう考えて、バスに乗るつもりでいたのですが、ふと気がつくど、一円もお金がないのです。といって、歩いて銀座までいくのは、たいへんです。どう

したらいいだろうと、思案しあんにくれるのでした。

光子さんは、すこしも気がつきませんでした。さつきから、いたずら小僧たちとはべつに、光子さんのあとをつけてくる、ひとりのあやしい男がありました。ネズミ色の背広に、ネズミ色のオーバーきて、おなじ色の鳥打帽とりうちぼうをかぶっています。ひげのないツルツとした顔に、まんまるなめがねをかけているのですが、その顔が、なんだかへんなのです。

顔色がよくって、しわがなく、スベスベしていて、洋服屋のショーウィンドーにかぎつてあるマネキンのような顔なのです。人形のような紳士です。

光子さんが、お金がなくて、バスに乗れないので、思案にくれて、たちどまっていますと、その人形紳士は、なにげなく、光子さんをおいこして、歩いていきましたが、そのとき、ポケットから銀貨をとりだして、そつと地面におとし、そのまま、むこうのかどをまがりました。

かどをまがったかとおもうと、そこにたちどまつて、へいのかどから、目ばかり出して、そつと光子さんのほうを、のぞいているのです。

光子さんは、立ちどまつていても、しかたがないので、うなだれたまま、歩きだしましたが、目が地面にそそがれているので、すこし歩くと、さつき人形紳士がおとしていった銀貨をみつけました。ひろいあげてみると、百円銀貨です。これがあればバスにのれます。だれがおとしたのかしらないが、しばらくおかりしておこうと、心をきめました。それから、急ぎ足になって、停留所につくと、銀座を通るバスをまつて、乗りこみました。

さいわい、立っている人が多いので、車内のみんなに、きたない姿を見られることはありませんでしたが、車のすみに、ソツと立っていても、すぐ近くの人からは、ジロジロながめられました。車掌しゃしょうさんまでが、顔をしかめて、じつと、こちらを見ているのです。

光子さんは、そのはずかしさがいっぱい、すこしも気づきませんでした。あのマネキンのような顔をした人形紳士も、このバスに乗っていました。

光子さんのあとから、乗りこんで、光子さんから、できるだけはなれて、そつぽをむいて、そしら

ぬ顔で、つりかわにぶらさがっているのです。ときどき、チラツ、チラツと、光子さんのほうを、ぬすみ見るのですが、光子さんは、銀座でおられるまで、気づかないでいました。

バスをおりると、光子さんは、すぐその玉村宝石店へいそぎましたが、人形紳士もそこでおりて、光子さんのあとをおいました。にぎやかな銀座通りのことですから、もう光子さんにかんづかれる心配はありません。

光子さんは、玉村宝石店のきらびやかなショーウインドーのあいだから、店にはいつていききました。

「おいおい、きみ、こんなところにはいつてきちゃいけない。おもらいなら、うらへまわりなさい。」

わかい店員が、光子さんのこじき姿を見て、どんなりつけました。

光子さんは、その店員をよく知っていました。しかし、あいてには、こちらがわからないのです。

「ねえ、あたし、わけがあつて、こんななりをしているけど、玉村光子よ。おとうさん、おくにいらつしやるでしょう。通つてもいいわね。」

店員はびつくりして、まゆずみでよこれた光子さんの顔を、ジロジロとながめました。

「なんだつて？ 光子さんだつて？ おじょうさんが、そんなきたない服をきられるわけがないじやないか。おどかさないでくれよ。さあ、出ていった、出ていった。」

「いいえ、どうしても、おとうさんにあいます。じやましないで、おくにとおしておくれ。」

「いけない。いけないいたら。こいつ気持ちがいだなさあ、出ていけ。出ていかないと、なぐるぞつ。」

そのさわぎをききつけたのか、そのとき、おくとのおさかいのガラスのドアが、サツとひらいて、おとうさんの玉村銀之助さんの姿があらわれました。

「かまわないから、表おもてにほうりだしてしまいな。そいつはおそろしいかたりだ。顔がにているのをさいいわい、光子だといつて、わしをゆするつもりなんだ。はやく、ほうりだしてしまえ。」

ああ、おとうさんまでが、と思うと、光子さんは泣きだしたくなりました。

「おとうさん、わけをはなしますから、きくだけき

いてください。こんななりをしています。あたしは光子にちがいないのです。」

死にもぐるいで、すがりつくようにたのみました。玉村さんは、とりあつてくれませんでした。

「そのわけは、もうちゃんと知っている。ほんとうの光子からきいている。光子、あいつに顔を見せてやりなさい。」

その声におうじて、光子さんになりました。あのことじきむすめが、玉村さんのうしろから、美しい顔を出しました。

ああ、なんというすばやさ！ にせ光子は、ほんとうの光子が、おとうさんのたすけをもとめて、ここにくることをさっして、自動車でさきまわりをしたのでしよう。そして、おとうさんときつつけて、いつほんものがあらわれても、だいじょうぶなようにしておいたのです。

それにしても、玉村さんまでが、にせものを信じるといふのは、にせものが、ほんものと、すこしもちがわないからです。どうして、こんなにもよくいた人間がいたのでしよう。考えられないことです。

おそろしい夢でも見ているようです。これにはなにか、ふかいわけがあるのでしよう。いままでの科学では、とけないような、おそろしい秘密があるのでしよう。

しかし、光子さんは、そこまでは考えませんでした。ただ、くやくして、かなしくて、はらわたがにえくりかえるようです。

「ちがいます。そいつが、にせものです。服をとりかえたのです。あたしの服を、そいつがぎているのです。あたしがほんとうの光子です。」

気ががいのように、泣きわめく、ことじきむすめを、玉村さんは、おそろしい顔で、にらみつけました。「わかつている。おまえのいいぐさは、もうちゃんとわかつているのだ。おい、みんな、かまわないから、そいつを、表にほうりだしてしまえ。」

もう、どうすることもできません。光子さんのことじきむすめは、おおぜいの店員に、こづきまわされて、表につきだされてしまいました。

光子さんは、しばらく店の前に、うずくまっていたましたが、やがて、あきらめはてたように、トボト

ポと、歩きはじめました。

すると、さっきの仮面のような顔の人形紳士が、どこからかあらわれて、光子さんに声をかけました。

「光子さん、きみが光子さんだということは、わしがよく知っている。きつとあかしをたててあげる。しかし、いまはいけない。ひとまず、わしのうちにきなさい。そして、計画をたてて、出なおすのだ。わかったね。さあ、わしのうちにいこう。」

ボソボソと、耳のそばで、ささやくようにいいます。

「あなた、どなたですか。」

光子さんはびつくりして、ききかえました。

「きみをよく知っているものです。あんしんしてついておいでなさい。さ、いきましよう。」

人形紳士は、そういったまま、しずかに歩きだしました。光子さんは、目に見えぬ糸でひっぱられてもするように、フラフラと、怪紳士のあとから、ついていくのでした。

小林少年

銀一君のときは、白ひげのじいさんがあらわれ、光子さんのときは、人形みたいな顔の紳士があらわれて、どことも知れぬあやしい家へつれていき、その地下室に、とじこめてしまったのです。

玉村さんのうちには、にせの光子さんと銀一君が、ちゃんといるので、だれも、人間がいれかわつたとは気がつきません。光子さんのにせものも、銀一君のにせものも、じつにうまく、ほんものまねをしていたのです。

ところが、たったひとり、にせの銀一君をうたがっている少年がありました。

それは、いつか銀一君がスリをはたらくところをみつけた、松井少年です。銀一君の同級生の松井君です。

松井君は、玉村銀一君とそっくりの少年が、もうひとりいることを、知っていました。もしその少年が、銀一君といれかわつたら、どうなるだろうと思

うと、なんだかおそろしくなってきました。

ある日、松井君は、休みの時間に、学校の運動場を、玉村銀一君と、肩をならべて歩いていました。

「ねえ、玉村君、きみ、ほんとうに玉村君だろうね。」

松井君がみようなことをいいました。

「なにをいってるんだ。ぼくは玉村だよ。どうして、そんなことをきくんない。」

銀一君は、おこったような顔をしました。

「きみ、それじゃあ、少年探偵団のバッジをもってるかい？」

「きようはもってないよ。うちにあるよ。」

松井君も玉村君も、少年探偵団員でした。団員はB・Dバッジを二十個以上、いつもポケットに入れていなければならぬ規則です。悪者につれていかれるようなとき、道にばらまいて、いくさきを知らせるためです。玉村君はその規則を知らないのでしょうか。

「じゃあ、七つ道具は？」

「えっ、七つ道具って？」

少年探偵団の七つ道具は、B・Dバッジ 万年筆

型の懐中電灯 呼び子の笛 虫めがね 小型望遠鏡

磁石 手帳と鉛筆です。

「それをもってないんだね。」

「うん。きようはもってないよ。」

「じゃあ、なにとなにだかいつてごらん。」

玉村君は、きゆうには答えられないで、しばらく考えていましたが、やがて、どもりながら、こんなことをいうのです。

「B・Dバッジ、それから懐中電灯、えーと、それから、オモチャのピストル、とびだしナイフ、えーとそれから……。」

そこで、いきづまってしまいました。玉村君は、七つ道具を知らないのです。松井君はさらに聞きましました。

「じゃあね、七つ道具のほかには、団長と中学生の団員だけがもっている道具があるんだよ。なんだか知ってる？」

玉村君は、口をもぐもぐさせていますが、答えることができません。知らないらしいのです。

「縄なわばしごだよ。」

松井君がおしえますと、玉村君は、いかにも知つたかぶりに、

「そうだよ。縄ばしごだよ。二本の縄に、足をかける木の棒が、たくさんくくりつけてある。」

「ちがうよ。黒いきぬ糸を、よりあわせたひもだよ。二本じゃない。一本きりだよ。そのきぬひもに、三十センチおきに、足の指をかける、むすび玉がついているんだよ。」

「あつ、そうだ。ぼく、うっかりしてたよ。黒いきぬ糸だったねえ。」

玉村君はそういつて、ごまかそうとしましたが、ほんとうは、なにも知らないことが、わかりました。

松井君は、いよいよ、こいつはにせものにちがいないと思ひました。その場合は、なにげなくわかれ、その日、学校がひけてから、明智探偵事務所の小林少年をたずねました。

明智先生は北海道に事件があつて、旅行中でした。小林少年は、少女助手のマユミさんとふたりで、るす番をしていました。

小林君は、少年探偵団長です。すぐに松井君を叱

接室にとおして、話をききました。

松井君は、お祭りの日に、玉村銀一君とそつくりの少年を見たことから、きよう学校でのできごとまで、すっかり話しました。

「だから、ひよつとすると、玉村君は、にせものといれかわつているんじゃないかと思うのです。そんなによくにた人間がいるなんて、ふしぎでしょうがないけれど、ほんとうなんです。ぼくは、そいつがスリをはたらいているところを、ちゃんと見たんですからね。」

「へんな話だねえ。ふたごでもないのに、そつくりの人間が、ふたりいるなんて、ちよつと、考えられないことだねえ。」

さすがの小林少年も、こんな話をきくのは、はじめてでした。

「だから、ふしぎなんですよ。しかし、たしかに、ふたご以上に、よくにたやつがいるんです。そいつが、玉村君のまわりに、ウロウロしていたんですからね。ぼくはどうもあやしいと思うんです。バツジももつていないし、七つ道具のことも知らないの

「は、ほんとうの玉村君でないでしょうかですよ。」

「なにか、たくらんでいるのかもしれないね。」

「玉村君のおとうさんは、宝石王でしょう。宝石を手に入れるための陰謀いんぼうかもしれません。玉村君のおとうさんに、このことを知らせてあげなくてもいいでしょうか。」

「うん、そうだね。明智先生がいらつしやるといいんだが、一週間ぐらいいはお帰りにならない。しかし、きみの話だと、ほつてもおけないようだから、ぼくが玉村君のおとうさんにあつて、このことをお話ししておいたほうがいいかもしれないね。」

「ええ、ぼくもそう思うんです。にせものといれかわつた玉村君が、どこかで、ひどいめにあつていると、たいへんですからね。」

「じゃあ、電話をかけて、玉村さんのつごうを聞いてみよう。いまは銀座の店におられるだろうね。店をたずねるのがいい。すまいのほうにはにせの銀一君がいるんだからね。」

そこで、小林君が電話をかけますと、玉村銀之助さんは、ちょうど店にいて、電話口に出ました。

玉村さんは小林君をよく知っていました。名探偵あけちこころう明智小五郎の少年助手として、たびたびがらをたてて、新聞にのるものですから、小林少年の名を知らない人はありません。ことに玉村銀一君は少年探偵団員なので、その団長の小林君には、おとうさんも、したしみをかんじていたのです。

「うちの銀一が、いつもおせわになります。」

玉村さんは、電話口で、そんなあいさつをするのでした。

「その銀一君のことで、至急にお話ししたいことがあるのです。これからお店のほうに、おじやましていいでしょうか。」

「いいですよ、それでは、お待ちしていますから、どうかおいでください、という返事でした。」

それから三十分ほどたつて、銀座の玉村宝石店の社長室には、社長の玉村銀之助さんと、小林少年と、松井少年とが、テーブルにむかいあつていました。

小林君が、松井君から聞いたことを、くわしく話しますと、玉村さんは、はじめは、そんなばかなことかと、とりあげようともしませんでした。が、小林

君が、うたがわしいわけを、だんだん、話していき
ますと、玉村さんは腕をくんで、考えこんでしま
いました。

そして、しばらくすると、ひとりごとのように、
つぶやくのでした。

「そうすると、あのこじきむすめも、ほんとうの光
子だったかもしれないぞ。」

「えっ、こじきむすめですって?」

小林君が、おどろいて聞きかえします。

「二―三日前に、こじきむすめが、この店にやって
きましてね。わたしがほんとうの光子だ。おとう
さんのそばにいるのは、にせものだといいはるの
です。」

光子というのは銀一の姉ですが、その光子が、じ
ぶんとよくにたこじきむすめと、服のとりかえつこ
をしたというのです。だが、そんなばかなことは、
しんじられないので、こじきむすめを、店からつき
だしてしまいました。思いだしてみると、そのこ
じきは、光子とそっくりの顔をしていました。銀一
がにせものだとすると、光子もにせものと、いれか

わっているかもしれない。

だが、まさかそんなことが……いや、いや、そう
かもしれない。ああ、おそろしいことだ。このふし
ぎなできごとのうらには、なにかの、ふかいたくら
みがあるのかもしれない。

しかし、そんなによくにた人間がいるものかし
ら。小林さん、きみはどう思います?」

「わかりません。なにか、とほうもない魔術がおこ
なわれているのです。この事件のうらには、おそろ
しい悪人がかくれているのかもしれない。

ぼくはこの事件を、探偵してみたいと思います。
明智先生がおるすなので、さんねんですが、ぼくに
できるだけのことを、やってみたいと思います。」

「ああ、それは、わたしからおねがいたいところ
です。わたしも、それとなく、光子と銀一のように
を注意しますが、あなたも外から、さぐつてくださ
い。もし、にせものとすれば、どこかにかくれてい
る、このたくらみのなかまと連絡をとるでしょうか
らね。」

それから、いろいろ、うちあわせをしたうえ、小

林、松井の二少年は、玉村さんにいとまをつけて、それぞれの家に帰りました。

黄金のトラ

小林君は、そのばんから、きたないこじき少年にばけて、渋谷の玉村さんのうちの見はりをつづけました。

はじめの夜は、なにごとありませんでしたが、ふたばんめに、おそろしいことがおこりました。

月もない、まっくらな夜です。八時ごろでした。

玉村さんのやしきの、うらてのコンクリートべいの下に、一枚のむしろがすててあります。とおくの街灯の光で、それがぼんやりと見えています。

あつ、そのむしろが、モゾモゾと動きました。よく見ると、むしろの下に人間がいるのです。こじきが、むしろをかぶって、寝ているのかもしれない。そのへんは、さびしいやしき町ですから、なん

のものの音もなく、死んだように、しずまりかえつています。

しばらくすると、町のむこうから、まっくらな大きなものが、スーツと、こちらへ近づいてきました。ヘッドライトをけした自動車です。

そのあやしい自動車は、こじきの寝ているむしろのそばに、とまりました。

自動車のドアが、音もなくひらいて、へんてこな大きなものが、とびだしてきました。

金色に光つています。それは人間ではなくて、四つ足で歩く猛獣もうじゅうでした。トラです。黄金のトラです。

東京の町の中にトラがあらわれたのです。しかも、そいつは自動車に乗ってやってきたのです。

金色に光るトラは、そのへんをノソノソと歩いていましたが、グツと首を低くして、ねらいをさだめたかと思うと、パツと、ひととびで、コンクリートべいの上にかげあがり、まるで綱わたりのように、せまいへいのでつぺんを歩いていきます。

地面のむしろの下の人間は、首をもたげて、じつ

と、それを見つめていました。へいの上を十メートルほど歩くと、黄金のトラは、玉村さんのやしきの中に、ピヨイとどびおりて、姿をけしてしまいました。

地面のむしろが、パツとはねのけられ、その下に寝ていた人間が、立ちあがりました。少年です。ボロボロの服をきた、こじき少年です。

少年は、すぐそばにとまっている自動車の中をのぞきました。そして、思わず、「おやつ。」と声をたてました。

自動車にはだれもいないのです。運転手もいないのです。では、あの金色のトラが、自動車を自分で運転してきたのでしょうか。そんな器用な猛獣がいるのでしょうか。

こじき少年は、だれもいないことをたしかめると、車のうしろにまわって、そのトランクのふたに手をかけて、もちあげてみました。

すると、かぎがかけないとみえて、ふたはスーツとひらきました。中をのぞくと、荷物もなく、からっぽです。こじき少年は、トランクにはいりこん

で、その中に身をかくし、ふたをしめてしまいました。尾行するつもりなのです。

いまに黄金のトラがもどってくるでしょう。そして、自動車を運転して、どこかへいくでしょう。こじき少年は、そのいくさきを、つきとめるつもりなのです。

それから十分ほど、なにごともおこりませんでした。すこしのも音もなく、すこしの動くものもありません。

やがて、コンクリートべいの上から、金色のものが、ピヨイとのぞきました。トラの顔です。ららんと光る目で、じつとへいの外をながめています。それから、へいの上にのぼって、ノソノソと歩きはじめ、自動車の近くまでくると、ピヨイと地面にとびおりて、車の運転席にはいりこみました。

やっぱり、この猛獣は、自動車の運転ができるのです。

自動車は、さびしい町から、さびしい町へと走っていきます。

二十分もたったころ、大きな洋館の門の中には

いつて、そこでとまりました。

黄金のトラは、自動車からおりて、四つんばいになつて、玄関のドアの前までいくと、あと足で立ちあがり、まるで人間のようになら、ドアをひらくと、その中に姿をけしてしまいました。

こじき少年は、トランクのふたを、ほそめにひらいて、そのようすを見ていましたが、トラが中にはいつてしまうと、ふたをぜんぶひらいて、トランクからはいだし、玄関のドアのそばまでいつて、中のようすに、耳をすましました。

しばらくまつて、そつとドアをひらいて、のぞいてみますと、どこかに、うすぐらい電灯がついていて、そのへんがボンヤリと見えています。

玄関のホールから、廊下がおくへつづいていますが、そこには人影もありません。いやトラの影もありません。

こじき少年は、だいたんにも、ドアの中にしのびこみ、足音をしのばせながら、廊下を、おくのほうへすすんでいきました。

二十メートルもいくと、むこうにキラッと光るも

のが見えました。黄金のトラの背中です。そいつは、やつぱり、あと足で立つて歩いているのです。

「ウフフフフ……。」

どこからか、みような笑い声が聞こえてきます。

こじき少年は、びっくりして、たちどまりました。ああ、やつぱりそうです。トラが笑つたのです。

「ウフフフフ……。」

そして、ヒヨイと、こちらをふりむきました。らんらんと光る目が、ほそくなつて、口は三日月形みかづきに笑つてゐるのです。

「おい小林君。きみは、こじきにばけているが、明智の助手の小林だろう。うまく、おれの計略にかつたな。きみはきつと、おれを尾行するだろうと思つた。それで、さそいをかけたのだよ。」

トラが人間のことばをしゃべつたのです。

こじき少年は、やつぱり小林君でした。小林君は、まんまと敵のわなにかかつてしまったのです。これはいけないと思ひ、いそいで、にげだそうとしました。

「おつと、にげようたつて、にげられやしないよ。」

ほらね。ワハハハ……。」

黄金のトラが、おそろしい声で笑いだしました。

その笑い声といっしょに、ダーツという音がして、てんじょうから大きな鉄ごうしがおちてきました。

廊下いっぱいの鉄ごうしです。もう、うしろへはいけません。

しかたがないので、前へつきすすもうとすると、またしても、ダダーツという地ひびきがして、前にも鉄ごうしがおちてきました。

前とうしろに鉄ごうしがおちたのですから、おりの中にとじこめられたのとおなじことです。

「ワハハハ……、どうだ、このしかけには、おどろいたか。さすがの小林少年探偵も、きょうから、おれのとりこだ。いまに、べつの部屋にいれてやるから、ゆっくり、滞在していくがいい。」

鉄ごうしのむこうから、トラがしゃべっているのです。ものをいうたびに、口がガツとさけて、赤い舌がペロペロと動くのです。

「きみは、いったい何者だっ。」

小林君は、せいっぱいの声で、どなりつけました。

「おれは人間だよ。しかし、きまった顔をもたない人間だ。だれにでもばけることができる。このとおり、猛獣にだってばけられる。トラにはかぎらない。シシにだって、ヒョウにだって、大蛇だいじやにだって、ばけられるのだ。」

おれの名をおしえてやろう。おれは百十四歳になるニコラ博士という魔術師だ。スーパーマンだ。」
「玉村銀一君とそつくりの少年をつれてきて、人間の入れかえをやつたのは、きみだな。いったい玉村君をどこへかくしたのだ。」

「銀一君はこのうちにいるよ。いや、銀一君だけじゃない。いろいろな人間が、とりこにしてある。銀一君のねえさんもいるし、そのほかにも、きみの知らない人間がたくさんいる。」

「みんな、かえだまと、いれかえたんだな。」

「アハハハ……、だんだんわかつてきたようだな。おどろいたか。おれはどんな人間のかえだまでも、つくることのできるのだ。」

たとえば、きみとそつくりのかえだまだつて、わけなくできる。魔法博士の神通力だよ。アハハハハ……。」

黄金のトラは、あと足で立ちあがつて、自由自在に、人間のことばをしゃべっているのです。じつに、なんともいえない、ふしぎなありさまです。聞いているうちに、小林君は、ゾーツとおそろしくなってきました。

この金色のトラのいうことが、ほんとうだとすると、小林少年は、ここにとじこめられたまま、小林少年とそつくりのかえだだが、明智事務所に戻っていくことになるかもしれません。すると、どんなことがおこるでしょう。考えれば考えるほど、おそろしくなってくるではありませんか。

猛獣自動車

宝石王の玉村銀之助さんは、じぶんのやしきのま

わりを見はついていた小林少年が怪人につれさられたことは、すこしも知りません。あのトラが自動車を運転するという奇妙な事件のあつた翌日、午前十時ごろ、玉村さんはいつものように、自動車にのつて、銀座の店へ出かけるのでした。

道路は自動車でいっぱいです。とある交差点で、何十台というトラックや、バスや、乗用車が、三列にならんとまつていました。そうして、十分もじつとまつていなければならないのです。玉村さんは、車のこんぎつには、なれていましたから、イライラしてもしかたがないと、じつと目をつぶつて、クツシヨンにもたれていました。

右の窓のガラスが、半分ひらいてあります。そのガラスをコツコツとたたたくものがありました。

おやつとおもつて、目をひらきますと、右がわすれすれに、一台の乗用車がとまつていて、その窓が、こちらの窓のすぐそばにあるのです。

玉村さんが、そこを見たときには、窓は、なにかボール紙のようなものでふさがれていて、中は見えませんでした。

しかし、さつき、コツコツと、こちらのガラスをたたいたのは、たしかに、その窓の中にいる人です。たたいておいて、ボール紙で窓にふたをして、かくれてしまったのでしょうか。

「へんだな。」とおもつて、じつと見ていますと、ボール紙がすこしずつ下のほうへさがっていった、そのうしろから、黄色くひかったものが、のぞきました。

まだボール紙が、半分しかひらいていないので、そのものの姿は、はっきりわかりませんが、なんだか、とてつもない、へんてこなものです。

ボール紙は、またジリジリと下のほうへさがっていきます。そして、窓の中が、すっかり見えるようになりました。

玉村さんはギョツとして、おもわず、車の中で立ちあがりそうになりました。

半分ひらいたガラスの中に、おそろしいトラの顔があったのです。

ランランとかがやく、大きな目で、じつとこちらをにらんでいます。

玉村さんは、だれかが、でつかいトラのオモチャをひぎの上のにせているのではないかとおもいました。

しかし、そのトラの顔は、人間の顔の倍もあるのです。そんなでつかいオモチャがあるのでしようか。

いや、オモチャではありません。

トラの目が動きました。口がひらきました。口中で、まっかな舌がへらへらと動きました。

「ウへへへ……。」

なんともいえないへんな声で、トラが笑ったのです。まるで人間の老人のような、しわがれた声で、うすきみわるく笑ったのです。

笑えるのは人間だけで、ほかの動物は笑えないはずです。

しかも、トラのような猛獣が笑うなんて、おもいもよらないことです。

玉村さんは、あまりのふしぎさに、あつけにとられて、こわさもわすれて、ぼんやりしていました。すると、こんどは、もつとへんなことがおこりま

した。トラがものをいったのです。

「用心するがいい。いまに、おそろしいことがおこる。」

たしかに、猛獣が人間のことばを、しゃべったのです。

玉村さんは、夢を見ているような気持で、まだぼんやりしていました。ふと気がつくと、ここは自動車行列のまんなかです。大きな声をたてれば、みんなが、力をかしてくるでしょう。いくら猛獣でも、このこんぎつのなかを、うまくにげられるものではありません。

玉村さんは、前にいる運転手の肩をつついて、ささやきました。

「見たか。」

「ええ、見ました。」

ふたりで、もう一度、そのほうをふりむくと、むこうの窓は、またボール紙でふたをされて、トラの姿は見えませんでした。

「みんなに知らせよう。大きな声でさげぶんだ。」

はんたいがわのドアをひらいて、からだをのりだ

し、

「オーイ、たいへんだあ。ここの車の中にトラがいるぞう……。」

と、なんどもくりかえして、さげびました。

自動車にトラがのっているなんて、あんまりとっぴなことなので、はじめは、だれも信じませんでしたが、こちらが、しんけんにさげぶものですから、勇気のある運転手たちが、自動車からとびおりて、あつまつてきました。

その人数がだんだんふえ、やがて、交通整理のおまわりさんまで、ピストルをにぎって、かけつけてきました。

みんなが、あやしい自動車のまわりをとりかこみました。

そのときには、窓のボール紙はなくなって、中が見とおせるようになっていましたが、そこにはひとりの紳士がこしかけているばかりで、トラなど、どこにも見えません。おまわりさんが、その紳士に声をかけて、ドアをひらき、中をのぞきこみました。

「この窓からトラの顔が見えたというんですが、ま

さか、トラといっしょにのつていたのではないでしょうね。」

「ハハハハ……、なにをおつしやる。そんなばかなことが、あるはずはないじゃありませんか。だれが、そんなことをいったのですか。」

「この人ですよ。」

おまわりさんが、そこに立っている玉村さんを指さしました。

「ハハハハ……、あなた、夢でも見たんでしよう。」

車の中でうたたねしていたんじやありませんか。」

「いや、たしかに、金色のトラが……。」

玉村さんはいいかえしましたが、見たところ、トラのかげも形もないのですから、けんかになりません。

「なあんだ、夢か。いくらなんでも、トラが自動車にのつているなんて、おかしいとおもったよ。」

みんな、チエツと舌うちをして、じぶんたちの自動車へかえっていきます。

おまわりさんは、ぐずぐずしていると、自動車がたまるばかりですから、どの車も、そのまますすむ

ように、あいずをしました。

玉村さんも、あわてて車にのりこみ、出発しましたが、車の列は、交差点で三方にわかれ、いつのまにか、あのあやしい自動車を見うしなつてしまいました。

大時計の怪

玉村さんは銀座の店につくと、すぐに明智探偵事務所に電話をかけて、小林少年に店のほうへきてくれるようにたのみました。

それから三十分もすると、小林少年が、玉村宝石店の社長室へはいつてきました。

読者のみなさん、なんだかへんですね。小林少年は、ゆうべ怪人のために、あやしい洋館の地下室に、とじこめられたはずではありませんか。小林君は、はやくも、そこからぬけだしてきたのでしょうか。いやいや、そうではなさそうです。そのことは、み

なさんがよくごぞんじです。

しかし、玉村さんはなにも知りません。そこへやつてきたのは、ほんとうの小林少年だと思いいこんでいます。

玉村さんは小林君に、さっきの事件をくわしく話してきかせました。

「そのトラがね、わたしの顔を見て、用心するがいい、いまに、おそろしいことがおこる、といったのだよ。」

「えっ、トラがですか。」

小林君は、びつくりしたように、ききかえしました。ほんとうの小林少年なら、じぶんも、ゆうべ、金色のトラがしゃべるのをきいたはずではありませんか。

「そうだよ。トラがしゃべるなんて、信じられないことだ。しかし、ほんとうにしゃべったんだよ。」

「人間がトラにばけていたのでしょうか。」

「うん、わたしもそう思う。超人ニコラ博士だ。ニコラ博士は、なんにでも、ばけられるというじやないか。」

まずトラにばけて、わたしをおどかしておいて、それから、みんなにかこまれたときには紳士にばけかわって、すましていたのかもしれない。」

「でも、おそろしいことがおこるぞと、予告をしたのですから、ゆだんはできませんね。」

「うん、それで、きみにきてもらったのだよ。この店には、たくさんの店員がいるけれども、あいてはおぼけみみたいなやつだからね。やっぱり名探偵のきみの知恵をかりたほうがいいとおもってね。」

「ありがとうございます。なによりも渋谷のおうちのほうが心配ですね。警察の力をかりるほかないでしょう。ぼくから警視庁の中村警部に電話でたのみましょう。そして、おうちのまわりを、まもつてもらうようにしましょう。」

玉村さんもそれがいいというので、小林君は警視庁に電話をかけましたが、中村警部はすぐにしようちして、その手配をしてくれました。中村警部は明智探偵の親友ですから、小林君をよく知っていて、少年だからといって、けいべつするようなことはないのです。

「ぼくはここにいて、あなたをまもります。なんだか、きょうは、あなたがあぶないような気がするんです。」

小林君は、そんなことをいって、部屋の中をコツコツと、歩きまわるのでした。

しばらくすると、若い店員が社長室へはいつてきました。

「れいの大時計をトラックではこんできましたが、ごらんになりますか。」

「うん、ここにはこんで、ここでひらいてもらおう。なにしろ、いまではめつたに手にはいらぬ美術品だからね。」

店員はそれをきくと、店のほうへもどつていきましたが、まもなく、ドカドカと足音がして、二メートルもある長方形の木箱きばこを、ふたりの運送屋の男が、はこびこんできました。

この木箱の中には、西洋では「おじいちゃん時計」といわれている、人間よりも背のたかい、ふりこ時計がはいっているはずで。

玉村商店は宝石商ですが、西洋の時計などもあつ

かっているの、ときどき、みような注文をうけることがあります。

あるお金持ちのおとくいが、明治時代にはやつた「おじいちゃん時計」がほしいというので、さがしていたところが、りっぱな大時計がみつかったので、きょう、それを見せにきたというわけです。

その時計をみつけたブローカーの男が、ふたりの運送屋にはこばれる木箱につきそつて、はいつてきました。

「やあ、橋本はしもとさん、ごころうさま。これがこのあいだお話しの時計ですね。」

玉村さんは、この橋本というブローカーとは、ついでこのあいだ、はじめてあつたのです。

「はい、じつにりっぱな美術品でございますよ。」
「機械もくるつていないですね。」

「ふしぎと、くるつておりません。ただしし時を知らせてくれますよ。」

「それはめずらしい。じゃあ、店のものもここによぶことにしましょうか。」

「いや、まず社長おひとりで、ごらんください。もつ

たいぶるわけではありませんが、ひじょうにめずらしい品ですから。」

「わたしひとりでね。それもいいでしょう。しかし、この小林君は、ここにいるにもかまいませんね。こんな小さいからだをしているが、じつは、わたしのボディガードなんですよ。」

「かまいませんとも。そのかたがボディガードですか。」

「ブローカーはげんそうな顔つきです。」

「民間探偵明智小五郎さんの助手の小林君です。」

「ああ、あの有名な小林少年ですか。そういうえば新聞の写真で、よくお目にかかつてますよ。なるほど小林さんなら、たのもしいガードですね。」

そういうわけで、小林少年は、このめずらしい「おじいちゃん時計」を、玉村さんといっしょに見ることになったのですが、そうときまると、小林君はなにを思ったのか、玉村さんのそばによつて、

「ドアのかぎを。」

と、ささやいて、手をだしました。

玉村さんは、ボディガードにかぎをわたしてお

くのはあたりまえだとおもい、べつにうたがいもせず、ポケットからかぎを出してわたしました。

「では、箱をひらくことにします。」

ブローカーが、ふたりの運送屋の男に目くばせすると、ふたりは、くぎぬきをもって、ギイギイと、木箱のくぎをぬきはじめました。

そのとき、玉村さんが箱に気をとられているすきに、小林少年が、みょうなことをしました。

小林君は、玉村さんのほうをむいたまま、横いざりに、ドアの前までいつて、手をうしろにまわして、なにくわぬ顔で、ドアにかぎをかけてしまったのです。

もつとへんなことがあります。小林君は、こちらをむいたまま、おしりのポケットから、大きなハンカチをまるめたようなものを、とりだして、ギユツと右手ににぎっているではありませんか。いったい、なにをしようというのでしょうか。

「さあ、よくごらんください。」

ブローカーが、もつたいぶつたちようしいました。

ふたりの男が、くぎをぬいてしまった木箱のふたを、横にのけますと、白い布でつつんだものが、箱いっぱいよこたわっています。

そのとき、部屋の中が、おそろしく、しんげんな空気で、みたされました。

ブローカーは、両手を、にぎりこぶしにして、おそろしい顔つきで、玉村さんをにらみつけています。

小林少年は、ドアの前から、ジリジリと、玉村さんのうしろへと、ちかづいていきます。手には、あの白いきれをまるめたものを、いつでももつかえるように、用意していました。

ふたりの男は、箱の中の白布しらぬのの、両はしをもつて、一、二、三で、パツとはねのけようと、身がまえしています。

一、二、三の号令ごうれいがかかったわけではありません。しかし、ブローカーのぶきみな目が、それとおなじはたらきをしました。

パツと、白布が、めくりとられました。

「あつー！」

玉村さんは、おもわずさげんだまま、身動きもできなくなっていました。

木箱の中には、大時計ではなくて、ひとりの人間がよこたわっていたのです。

死人でしょうか。いやいや、生きています。しかも、それは、じつにおどろくべき人間だったのです。その男は、箱の中でゆつくりと上半身をおこし、それからヒヨイと立ちあがると、箱の外へでました。

ああ、ごらんなさい。玉村さんが、ふたりになつたではありませんか。

いま箱からでた男は、玉村さんとそっくりの顔をしています。背広やネクタイまで、玉村さんのとおなじです。ふたりの玉村さんが、むかいあつて、一メートルのちかさで、顔をにらみあつて、立ちはだかっているのです。

じつにふしぎなありさまでした。じつと見ていきますと、どちらがほんもので、どちらがにせものだから、わからなくなってきました。

こんなにもよくにた人間が、この世にあるもので

しょうか。超人ニコラ博士の魔術にちがいありません。しかし、このおそろしい魔術は、いったい、どんな種があるのでしょうか。

玉村さんも、そこに気がつきました。このまま、じつとしていたら、箱からでてきた男が、じぶんになりすまし、じぶんは箱づめになって、どこかへ、つれさられるのにちがいないと、気がついたのです。

店にはおおぜいの店員がいます。大声でたすけをもとめたら、すぐにかけてくれるはずですよ。

玉村さんは、口をいっばいにひらいてわめき声をたてようと思いました。

しかし、そのときはもうおそかったのです。いっばいにひらいた口に、パツと、白いハンカチのようなものが、とびついて、ふたをしてしまいました。小林少年が、うしろから手をまわして、麻酔薬をしました。玉村さんの口と鼻に、おしつけたのです。

それからあとは、手ばやくパタパタとことがはこばれてしまいました。

麻酔薬で気をうしなつた玉村さんは、木箱の中にねかされ、箱のふたがくぎづけになりました。

にせの玉村さんは、ゆつたりと安楽あんらくいすにこしかけて、さも社長さんらしい口ぶりで、さしずをしました。

「小林君、ドアをあけて、店のものをよんでくださらんか。」

小林少年は、いうまでもなく、これもにせものですが、さつきのかぎをポケットからだして、ドアをひらき、

「店のかた、ちよつときてください。」
と、声をかけました。

ひとりの若い店員が、いそいではいつてきました。

「じつにけしからん。きみ、これをすぐに、もつてかえてください。こんなにせもののに、ごまかされるわしじゃあない。」

「いって、いまはいつてきた店員のほうにむきなおり、

「この人をおくりだしてくれたまえ。この人は、と

んだごまかしものを、もちこんできたのだ。」

ブローカーの男は、首うなだれて、ふたりの運送屋に木箱をはこばせ、しおしおと店をでていきました。

外にはトラックがまたせてあったので、木箱をそれにのせ、ブローカーもそのわきにつて、トラックは、どことも知れず、走りきってしまいました。

さいごのひとり

さて、銀座の店で、玉村銀之助さんが、にせものといれかえられたあくる日の夕方、渋谷区の玉村さんの家に、またしても、おそろしいことがおこったのです。

にせものの光子さんと、銀一君は、一階の子ども部屋の窓から、庭をながめていました。あたりはもううす暗くなつていて、木のしげった中は、まったくです。

そのまっくらな中で、チラツと、金色のものが動いたのです。ふたりは、それを見つめていました。

「なにを見ているんだね。庭になにかいるのかね。」

ふりむくと、そこにおとうさんの銀之助さんが立つていて、にこにこ笑つていました。いうまでもなく、このおとうさんも、にせものなのです。

「木の下に金色のものが見えたんです。」

銀一君がこたえました。

「えっ、金色のものだつて?」

「ええ、きつとあいつですよ。ね、あの金色のトラですよ。」

そのとき、家の横から、人の姿があらわれ、庭のむこうのほうへ、歩いていくのが見えました。洋服をきた女の姿です。

「あつ、おかあさんだわ。どうして庭へ出ていらつしやつたのでしょうか。」

光子さんが、ふしぎそうに、つぶやきました。

「あつ、庭のへの戸がひらいた。だれかはいつてくる。おかあさんはきつと、あの人にあいにくつたんだよ。」

銀一君が大きな声でいきました。

おかあさんのあき子さんは、夕やみの中を、いそぎ足で、裏口のほうへ、すすんでいきます。そこから、はいつてきた男に、約束でもしてあったのでしよう。

あき子さんの歩いていく左がわに、大きな木のしげったところがあり、その中はまっくらです。

「あつ！」

光子さんも、銀一君も、おとうさんも、おなじように、おどろきの声をたてました。

木のしげみの中に、ピカツと光つたものがあるからです。

やがて、そのものが全身をあらわしたのを見ると、やっぱりあのおそろしい金色のトラでした。

そいつは、ノソノソと木のしげみから、はいだしてきて、ウオーツと、ものすごいうなり声をたてるのでした。

おかあさんのあき子さんは、ハツとして、そのほうを見ましたが、見たかと思うと、クナクナと、くずれるように、その場にたおれてしまいました。

それを窓からながめた、おとうさんも、光子、銀一のきょうだいも、ふつうならば、なんとかしておかあさんをたすけようと、とびだしていったのでしようが、三人ともにせものですから、おかあさんがたおれたつて、へいきです。

おとうさんと、ふたりの子どもは顔を見あわせて、ニンマリと笑いました。ああ、なんとという、無慈悲な笑い顔だったでしょう。

庭のむこうでは、裏口から、さっきの男のほかにも、もうひとり、はいつてくるのが見えました。

男たちは、たおれているあき子さんのそばによると、そのからだをふたりでかかえて、裏口の外へ出ていきます。

あの金色のトラは、あき子さんをきぜつさせてしまえば、もう用事はないのでしよう。また、木のしげみのくらやみの中に、姿をかくしてしまいました。

窓の三人は、もう一度、顔を見あわせて、ニンマリと笑いました。三人とも、あき子さんが、どんなめにあうのか、ちゃんと知っているらしいのです。

裏口のへの外には、一台の自動車がとまつていました。ふたりの男は、その車のドアをひらいて、はこびだしてきたあき子さんのからだを、中にいれました。

すると、それといれちがいに、車の中から、あき子さんが、とびだしてきました。気をうしなつていたあき子さんが、きゆうに、正気しょうきついて、いれられたばかりの車から、出てきたのでしょうか。

いや、そうではありません。車の中をのぞいてみますと、そのシートに、あき子さんが目をつむつて、たおれているではありませんか。

車から出てきたのは、あき子さんとそっくりの顔をした、べつの女なのです。ニコラ博士の魔法が、またしても、にせものをつくりだしたのです。

ふたりの男が、車の中にはいると、自動車はしずかに、すべりだし、どこもしれず、走りさつてしまいました。

あき子さんとおなじ顔をして、おなじ服をきた女は、裏口をはいると、その戸をしめて、ゆっくり、こちらへちかづいてきました。

じつによくにっています。男たちに、かつぎだされたあき子さんが、そのまま、もどつてきたとしか思われません。

あき子さんは、窓の下までくると、そこからのぞいている三人を見あげて、ニッコリと笑いました。「あき子、話があるから、あがつていらつしやい。」玉村さんが、声をかけました。これで玉村家の族はぜんぶにせものにかわつてしまったのです。

しかし、四人とも、おたがいにそれを知りながら、まるでほんもののように、はなしあつていました。

日本中の宝石

それからしばらくすると、玉村さんと、あき子夫人と、光子さんと、銀一君の四人は、玉村さんの書齋にあつていました。

その部屋の一方の壁に、大きな金庫がはめこんで

あります。にせの玉村さんは、ダイヤルの暗号を、ちやんと知っていて、それをまわして、金庫をひらきました。

金庫の中には、たくさんのひきだしがついていて、それに宝石がいっぱいはいつているのです。

銀座の店においてあるのは、ありふれた宝石ばかりで、ほんとうにたいせつな宝石は、みんなこの金庫にしまつてあるのです。店にある宝石でも、ひとつ百万円以上のものは、まい日かばんにいれてもちかえり、この金庫にしまつておくことになっていました。

「このひきだしには、何百という宝石がはいつている。十億円をこすわしの財産だ。どこへもつていこうと、わしの自由な財産だ。わかつたかね。」

この宝石のために、われわれは、こうしてはたらいっているのだ。いや、ここにある宝石だけではない。宝石王玉村銀之助の信用を利用して、日本全国をめばしい宝石を、すつかりあつめてしまおうというのが、ニコラ博士の計画だ。」

「どうして、あつめるのでしょうか。」

にせのあき子夫人が、ききかえしました。

「それには、こういう方法がある。まず、わしが主催者になつて、全国の宝石商や、有名な宝石をもっているお金持ちによびかけて、宝石展覧会をひらくのだ。そして、日本のめばしい宝石を、一カ所にあつめてしまうのだ。」

展覧会をひらいているあいだに、出品されたぜんぶの宝石のにせものをつくるのだ。人間のにせものさえこしらえるニコラ博士のことだ、宝石のにせものぐらい、朝めし前だよ。そのにせものと、ほんものと、すりかえてしまう。わしは展覧会の主催者だから、すりかえるのは、わけもないことだからね。」

「ふーん、うまい考えですね。そうして展覧会の宝石をすりかえたあとは、わたしたちは、この世から消えうせてしまうのでしょうかね。」

「そうだよ。そこで、われわれにせものの役目は、おわるのだ。」

にせの玉村さんは、金庫のとびらをしめると、ペルをおして、女中さんをよび、ばんごはんの用意をするように、いつつけました。玉村家にはコックの

おぼさんがいて、毎日おいしいごちそうをつくつて
いるのです。

しばらくすると、四人は食堂のテーブルにむかっ
て、食事をしていました。おいしい洋食のおさら
が、つきつきとはこぼれます。

玉村家の書生さんも、女中さんも、コックのおぼ
さんも、玉村さんたち四人が、ぜんぶにせものと
は、すこしも気がつきません。いつものご主人たち
と信じきつて、いいつけに、そむかないようにして
いました。

「もうこれで、すっかり安心ですね。そのせいか、
こんやのごちそうは、たいへん、おいしゅうござい
ますわ。」

あき子夫人が、フォークで肉を口にはこびなが
ら、たのしそうにいました。

「うん、そうだね。わしも、このブドウ酒が、いつ
もよりもうまいようだ。それにしても宝石展覧会
を、はやくひらきたいものだね。」

「ぼくたちも、その展覧会が、はやく見たいよ。ね
え、ねえさん。」

「ええ、日本中の有名な宝石が、ぜんぶあつまった
ら、どんなにきれいでしょね。」

そのとき、女中さんがはいつてきて、明智探偵の
助手の小林少年が、たずねてきたことを知らせまし
た。

「ああ、それはちょうどいい。ここにおどおしな
さい。」

小林少年のにこにこ顔があらわれ、テーブルにす
わりますと、そこに新しい料理のさらがはこぼれ、
小林君も食事のなかまにくわりました。

「玉村さん、銀一君の友だちの松井君が、へんなこ
とをいつてきたので、ぼくも一度は光子さんや銀一
君をうたがいましたが、みんな松井君のひとりがて
んだとわかりました。同じ顔の人間が、この世にふ
たりいるなんて考えられないことですからね。」

「そうですね、小林さん。そんなばかなこと、ある
はずがないやね。おかげで、わしもすっかり安心し
ましたよ。」

玉村さんはそういつて、さっきの宝石展覧会の話
をしました。

「そりやすばらしいですね。日本中の名だかい宝石を、ぜんぶあつめる展覧会なんて、これまで一度もなかったでしょう。ぼくも見にいけますよ。どんなに美しいことでしょうね。」

もちろん、この小林少年もにせものです。五人のにせものが、同じテーブルをかこんで、さもほんものらしく、たのしげに語りあっているのです。

空飛ぶ超人^{ちやうじん}

お話かわつて、やはりそのころの、ある夜のことでした。

少年探偵団のおもな少年たち十人が、芝公園の森の中にあつまっていました。

その十人のなかには、小林団長と、中学二年の白井保君もまじっていました。白井君は銀座の白井美術店の子どもなのです。読者諸君はこの白井保君の名を、どこかで読まれたでしょう。ひとつ思いだし

てみてください。

少年たちは小林団長のまわりを、まるくとりかこんでいました。空には満月にちかい月がさえて、みんなの顔を青白くてらしています。

「こんやここにあつまったのは、この森の中におこる、ふしぎなできごとを見るためです。きみたちは、映画やテレビで、アメリカのスーパーマンが空を飛ぶのを見たことがあるでしょう。あれとよく似たスーパーマンが、日本にもあらわれたのです。

ここにいる白井保君が、そのスーパーマンの空を飛ぶところを見たのです。そして、その人と話をしました。その人は、超人ニコラ博士と名のつたそうです。」

「あ、超人ニコラ……。」

「ニコラ博士……。」

少年たちが、口々に、つぶやきました。超人ニコラ博士の名は、いつとはなく、少年探偵団員たちに知れわたっていたのです。

「ニコラ博士は白井君に約束しました。こんや八時に、芝公園のこの森の中に飛んでくるから、少年探

偵団の友だちをさそつて見にくるがいいといったさうです。

ほくも、べつのにきに、ニコラ博士にあつたことがあります。そのとき、博士は長い白ひげを胸にたれた老人でした。しかし、博士のほんとうの姿はわかりません。自由に顔かたちをかえることができるからです。あるときは人形のような顔をしていたといます。白井君があつたときには、どんな顔をしていたのですか。」

「まつかな顔をしていました。かみの毛も、まゆ毛も白くて白いひげをはやしてました。むかしの絵にあるテングにそっくりでした。」

「そうだ、日本のテングも空を飛ぶことができた。だから、博士はテングの姿になつて、飛んでみせるのだよ。」

ニコラ博士が、どういう悪事をはたらいているか、少年たちには、まだよくわかりません。ですから、これを警察に知らせ、博士をつかまえるということは、考えてもみないのでした。それよりも、スーパーマンが空を飛ぶのを、見たくてたまらな

かつたのです。

「いま七時五十分だ。森の中にはいつて、まつことにしよう。月の光であかるいから、空飛ぶ博士がよく見えるだろう。」

十人の少年たちは、ゾロゾロと森の中にはいつていきました。高い木が立ちならんでいるあいだに、まるい空地があります。

「約束の場所は、ここだよ。」

白井君がそういつて、みんなの歩くのをとめました。

十人は空地の一方のすみに、ひとかたまりになつて、ボソボソと、ささやきあつています。

「八時五分前だよ。」

小林団長が、腕時計を月の光にすかして見ながら、いいました。

もうあと四分、……三分、……二分、……一分。八時はまたたくまに、ちかづいてきました。

「あつ、飛んでくる。ほら……。」

ひとりの少年が、空を指さして、さげびました。ああ、ごらんさい。むこうの空から、一直線に

飛んでくるのです。黒いマントを、コウモリの羽のようにひるがえし、フサフサとした白ひげを風になびかせながら、両手をまつすぐ前につきだして、水の中をおよぐように、こちらへ、ちかづいてくるのです。

「あつ、赤い顔してる。でっかい鼻がついている。テングさまそっくりだ。」

もう、そこまで見わけられるのです。

空飛ぶ超人は、一本の高いスギの木のてっぺんにちかづくとき、そのこずえの枝に、こしかけました。

「あなたは、ニコラ博士ですか。」

白井君が、大きな声でたずねました。

「そうだよ。きみたちは少年探偵団だね。」

「そうです。ここへおきてきませんか。」

こんどは、小林団長がさげびました。

「きみは、小林君だね。」

「そうです。」

「じゃあ、そこへいくよ。」

ニコラ博士は、サルのように、木の枝をつたいながら、少年たちのそばにおりてきました。

ほんとうに、まつかなテングさまの顔です。頭には、針金のような白いかみの毛が、モジャモジャとみだれています。

肩から黒いマントをヒラヒラさせて、その下には、ピツタリ身についた黒いシャツとズボンをはいているようです。

少年たちは、そのぶきみな姿に、思わず、あとじさりをしました。

「わしは、きみたちのような少年がすきだ。なにもしないから、こわがることはない。さあ、わしについて、こちらへくるがいい。きみたちに、おもしろいものを見せてやるよ。」

こわい顔をしています。いうことはやさしいので、少年たちは、だんだんニコラ博士のほうへ、ちかよっていききました。

すると、博士は、

「さあ、わしについてくるのだ。」

といいながら、森のおくへと、はいっていきます。

十人の少年たちは、あとにつづきました。枝がしげりあっているので、月の光もささず、そのへんは

もうまっくらです。

ニコラ博士は、フワフワと、宙ちゆうにうくように、歩いていきます。やみのなかでも、博士の姿だけは、クツキリと見えるのです。

「あつ。」

びつくりするようなさけび声こゑが、ひびきわたりました。ひとりや、ふたりの声ではありません。十人の少年が、一度にさけんだような、おそろしい声でした。

少年たちの足の下の地面が、消えてしまったのです。あつというまに、十人のからだからだが、下へおちていきました。

ドシンと、しりもちをついたところは、木の葉がいつぱいたまたまつていて、それほどいたくはありませんでした。

しかし、それはふかい穴の底で、とても、はいあがることはできません。

「ワハハハハ……、ざまあみろ。少年探偵団は、なまいきにも、わしの正体を探偵しようとした。わたしにはそれがちゃんとわかっていたので、ちよつと、

おかえしをしたんだよ。ワハハハハ……、いいきみだ。いつまでも、その穴の中なかでくるしむがいい。」
ニコラ博士の笑い声は、だんだん、上のほうへ、とおざかっていきました。さっきのスギの木にのぼっていったのでしよう。

それからしばらくすると、スギの木のとっぺんから、大きなコウモリのようなものが、月夜の空へ飛びたつていくのが、ながめられました。むろん超人ニコラ博士の飛行姿です。

十人の少年がおちこんだのは、ニコラ博士が、まえもつてこしらえておいた、おとし穴でした。大きな穴の上にかれ枝をならべ、その上に木の葉をつみかさねて、穴とわからないようにしてあったのです。

少年たちは、なかまの背中ののつて、やつと穴の外にはいだし、こんどは、その上から手をのぼして、なかまの少年たちを、ひっぱりあげるといいうやりかたで、とうとう、みんなが穴の外に出るようになりました。

それにしても、少年たちを、ここにつれだしたの

は小林団長と白井保君でした。このふたりが、とつくににせものにかわつてゐることは、読者諸君がよくごぞんじですね。にせものは、つまり博士の手下ですから、少年たちをくるしめる手びきをしたのは、あたりまえです。

一本の針金

ところで、ほんとうの小林君は、ニコラ博士の手下の、ふたりの男につれられて、地下室の牢屋の中へいれられてしまいました。

そのおなじ地下室には、玉村銀一君や、白井美術店の子どもの白井保君なども、とじこめられていたのですが、小林君のいれられた牢屋は、銀一君たちの牢屋とは、すこしはなれていましたので、小林君は、まだなにも知りません。

ふたりの男が、小林君を牢屋にいれて、鉄ごうしにかぎをかけて、いつてしまいますと、それといれ

かわるように、鉄ごうしの外へ、白ひげの老人が、あらわれました。さつきまでトラにばけていたニコラ博士が、こんどは老人に姿をかえてゐるのです。「小林君、少年名探偵も、いくじがないねえ。まんまと、つかまつてしまつたじゃないか。しばらく、ここにいてもらうよ。ひもじいおもいなんかさせないから、ゆつくり、とまつていくがいい。」

「なぜ、ぼくをとじこめたのですか。」
小林君は、鉄ごうしに顔をくつつけるようにして、ききただしました。

「きみが、じやまだからさ。わしが、おもうぞんぶんのことをやるのには、きみはじやまものだ。いや、きみばかりじやない。きみの先生の明智小五郎も、むろん、じやまものだ。だから明智が北海道から、かえつてきたら、やつぱり、ここに、とじこめてしまつつもりだよ。」

「えつ、明智先生を？」

小林君は、おもわず、大きな声をたてました。

「そうとも、わしは日本にきて、まもないが、明智小五郎のことは、よく知つてゐる。日本で、なにかわ

るいことをするために、まず、明智をやつつけなければならぬ。もしなければ、こつちが、あいつにやられてしまうのだからね。ウフフフ……。」

「明智先生が、きみなんかには、つかまるもんか。」

小林君は、顔をまっかにして、どなりました。

「ハハハハ……、きみにとつちやあ、神さまみたいな明智先生だからね。オールマイティーだからね。だが、このニコラ博士はそれ以上の力をもっているのだ。スーパーマンだ。ワハハハ……、スーパーマンとオールマイティーの戦いだ。ゆかい、ゆかい、かんがえただけでも、胸がおどるよ。」

「ハハハハ……。」

小林君も、まけないで、笑いとばしました。

「きみは明智先生を知らないのだ。きみみたいなおいぼれに、まけるような先生じゃない。いまに、びつくりするときがくるよ。」

「ウフフフ……、小林君、なかなか、いせいがいね。なあに、どちらが、びつくりするか、そのときになってみれば、わかることだ。それよりも、小林君、きみがここにとじこめられているあいだに、

もうひとりのきみが、なにをしているか、知っているかね。」

「えつ、もうひとりのぼくだつて?」

「そうとも、顔もからだも、きみとそつくりのやつが、もうひとりいるんだ。そして、きみのかわりに、だいじなしごとをやっているのだ。」

それをきくと、小林君は「しまった」とおもいました。小林君がこの事件にかかりあったのは、玉村銀一君が、にせものといれかわっているらしいことからでした。ニコラ博士は、なんかの魔力によつて、ほんものと、全然ちがわない、にせの人間をつくりだすことができるのかもしれない。そして、こんどは、小林君が、その魔力にかかったのです。小林君とそつくりの少年が、どこかに、もうひとり、いるらしいのです。

「ウフフフ……、顔色がかわったね。おどろいたか。ニコラ博士の魔法が、こわくなったか。もうひとりのきみは、いま、あるところで、わしの命令のままに、はたらいっているのだ。」

え、わかるかね。きみがよびだせば、少年探偵団

員は、みんな、あつまってくる。そして、きみのいうことには、なんでも、したがうのだ。

にせの小林は、なにを命令するかわからない。だから、少年探偵団員は、どんなひどいめにあうかも、わからない。いや、そんなことよりも、にせの小林は、もつともつと、おそろしい悪事をはたらいているかもしれないよ。

オールマイティーの明智先生だって、きみとそつくりの少年のことなら、信用するにちがいない。そうすると、どんなことがおこるだろうね。……え、小林君。にせの小林という武器をつかえば、オールマイティーが、オールマイティーでなくなってしまうのだよ。ハハハハハ……」

ニコラ博士は、その笑い声をのこして、鉄ごうしの前から、むこうへ立ちさつていきました。

小林君は、すつかり、まいってしまいました。じぶんとそつくりのにせものが、どつかで悪事をはたらいているのかとおもうと、気が気ではありません。しかも、その悪事が、どんなことだかわからないのですから、いよいよ心配です。

明智先生が北海道からかえられる日も、ちかづいています。もし、にせものが先生を出むかえて、うそをついたら、どんな危険なことがおこるかかもしれません。

考えれば、考えるほど、心配でしかたがありません。いつこくも早く、ここからにげだし、にせもの

ばけのかわをはいで、わるいことのおこるのを、ふせがなければなりません。

どうしたら、ここをにげだすことができるでしょう。小林君は、しばらくのあいだ、しんけんな顔で、かんがえていましたが、やがて、なにをおもいついたのか、ニツコリと笑いました。

「あつ、そうだ。こういうときに、あれをつかうのだ。」

そんなひとりごとをいいながら、ポケットから、筒つつのようにまるめた、レーザーのシースをとりだし、鉄ごうしの外から、のぞかれやしないかと、注意しながら、そのシースをひらきました。

それは電気工事をやる人が、腰にさげている皮の

シースを小さくしたようなもので、小型のナイフ、ペンチ、ヤットコなどがさしてあり、また、ふといや、ほそいや、十センチあまりの針金が、何本もいれてあるのです。少年探偵団の七つ道具のほかには、小林団長だけは、いつもこのシースを、用意しているのです。

小林君は、鉄ごうしのとびらの外がわの錠前じょうまえの穴をしらべて、それに合うふとさの針金をえらびだし、ヤットコを片手に、針金ぎいくをはじめました。

針金を、錠前の穴にいれて、なにかコチコチやっていたかとおもうと、それをとりだして、さきのところを、ヤットコでキュツとまげ、また穴にはめて、コチコチやつてから、とりだして、キュツとまげ、それをなんども、くりかえして、針金を、ふくぎつな、かぎのような形に、まげてしまいました。

こうして、とっさのあいかができあがったのです。もとは、錠前やぶりのどろぼうが、かんがえだしたのですが、明智探偵はそののつくりかたを知っていて、助手の小林少年におしえておいたのです。

この針金のあいかがをつくるのには、いろいろな

コツがあつて、ひじょうにむずかしいのですが、小林君は、練習をかさねて、いまでは、それができるよになつていました。

玉村さんのへの外で、金色のトラにであつたのは午後八時ごろでしたから、いまはもう、真夜中です。ニコラ博士や、その手下のやつらは、もうねてしまつたのでしょう。耳をすますと、シーンとしずまりかえつていて、なんのもの音もありません。小林君は、にげるのは、いまだとおもいました。

かぎのよになつた針金を、錠前の穴にいれて、しずかにまわしますと、カチツと音がして、錠がはずれました。

そつと鉄ごうしのとびらをひらいて、外に出ると、もとのとおりにしめて、針金で、かぎをかけたました。

あとで、小林君がいないことがわかつて、錠前もとのとおりに、しまつていますのですから、どうして出ていったかわからないので、びつくりするにちがいありません。こんどは、小林君のほう魔法つかいになつたわけです。

廊下のところどころに、小さな電灯がついているばかりなので、ひどくうすぐらいのです。どちらへいけば、外に出られるのか、まるで、けんとうもつきません。

小林君は、まず右のほうへいつてみることにして、壁をつたうようにして、しずかに歩いていきました。

もしこのとき、小林君が右ではなくて左のほうへいったならば、そこに、じぶんがいれられていたのとおなじような、鉄ごうしの牢屋が、いくつもならんでいて、その中に、玉村銀一君などが、とじこめられているのを、みつけだしたでしょうが、そのときは、はんたいの方角へ、歩いていったのです。そして、そのかわりに、もつともつとおそろしいことに、ぶつかってしまったのです。

三重の秘密室

そこは、秘密の地下室ですから、コンクリートとながしこんだばかりの、ザラザラの灰色の壁がつづいています。

小林君は、足音をしのばせながら、その壁をつたつて、おくへおくへと、すすんでいきました。うすぐらい廊下には、ところどころに、ドアがしまつていきます。ドアにでくわすたびに、そこに耳をつけるようにして、中のも音をきこうとしましたが、人がいるのか、いないのか、なにもきこえません。音のしないドアを三つすぎて、四つめにちかづきますと、ボソボソと、だれかの話し声がもれてくるではありませんか。

かぎ穴に目をあてみると、中には、あかあかと電灯がついていて、いすにかけた人の、うしろ姿が見えます。ひとりではありません。二―三人の間が、テーブルにむかいあつて、話をしているらしいのです。

「ぼくたちは、みょうなことから、先生の弟子になりましたが、先生の魔法の力には、まったくおどろいてしまいました。そっくりおなじ人間を、いくら

でも、こしらえることができるなんて、人間の知恵ではありません。神さまか、悪魔の知恵です。あの三重の秘密室の中には、いったい、どんなしかけがあるのですか。」

手下の男の声です。「三重の秘密室」とは、なにをさすのでしょうか。

読者諸君は、この地下の牢屋が、二重の秘密室であることを、ごぞんじでしょう。玉村銀一君がニコラ博士にかどわかされたとき、まず地下室の物置きにはいり、その壁のボタンをおして、二重の秘密室にはいったのでした。そこまではわかつています。しかし、「三重の秘密室」が、どこにあるかは、まだわかりません。たぶん、二重の秘密室の、もうひとつおくの、秘密室なのでしょう。

その「三重の秘密室」には、手下の男たちも、はいつたことがないらしく、その中に、どんな秘密があるのかと、きいているのです。

「それは、まだいえない。いつかは、きみたちにもおしえるときがくるだろうが、いまはいえない。そこには、わしの魔法の種が、かくしてあるのだ。」

ともかく、そこからは、ほんものとそっくりのにせものが、うまれてくる。いくらでも、うまれてくるのだ。」

「では、先生は、ほんものと、にせものと、人間のいれかえをやつて、なにをしようというのですか。」

「それは、きみたちも、知っているじゃないか。まず宝石展覧会をひらくのだよ。にせの玉村銀之助にひらかせるのだ。玉村の信用で、日本全国の宝石があつてくる。それをひとばんのうちに、にせ宝石といれかえて、ほんものはぜんぶ、わしがちようだいするのだよ。」

ニコラ博士の声です。この宝石展覧会のたくらみも、読者諸君は、とつくに、ごぞんじのはずですね。

「宝石を手にいれたら、そのつきには美術品ですか。」

また、べつの方がたずねます。

「そのとおり。だが、これは宝石みたいに、ぜんぶ一カ所にあつめるといふわけにはいかん。まず美術商のもっているものからはじめて、それから、各地の博物館や、お寺の宝物ほうもつなどに手をのばしていく。」

美術商の主人を、わしのつくつたにせものとい

れかえ、博物館の館長や館員を、にせものといれかえ、お寺の坊さんを、にせものといれかえれば、美術品をぬすみだすなどわけもないことだよ。ウフフフフ……。」

ニコラ博士が、うすきみわるく笑いしました。

「それでおしまいですか。先生の魔法でなら、どんなことだって、できないことはないようにおもわれますが。」

「たとえば?」

ニコラ博士は、弟子たちの知恵をためしでもするかのように、ききかえしました。

「たとえば、ある国を、のつとることも、かんたんにできるでしょうし、また、ある国をほろぼすこともできるでしょう。」

「ふーん、きみは大きなことを、かんがえているね。では、ある国をのつとるには、どうすればいいんだね。」

ニコラ博士は、自分はよく知っているけれども、あいてに、しゃべらせてみようというようになちよう

しで、たずねます。

「それは、その国の総理大臣や、政党の首領などを、にせものといれかえればいいのです。そうすれば、その国のことは、いつさい、にせものの、おもうままになるじゃありませんか。」

ある国をほろぼすのも、おなじことです。にせものの総理大臣や、政党の首領や、軍隊の長官が、めちゃくちゃをやれば、その国は、たちまち、ほろんでしまいます。」

「なるほど、だれでもかんがえることだね。わしの魔法の力によれば、どんな大きなことだって、できないことはない。わしは世界をかえてしまうことができる。世界をてんぶくさせることができる。また、ナポレオンのように、世界を征服することもできる。」

もつとおそろしいことをいうならば、にせもの力で、原水爆の秘密をぬすむこともできるし、また、にせものによって、ふいに原水爆を爆発させることだってできるのだ。

人間のにせものを、自由に、うみだす力をもつて

いるわしの字引きには、“できない”ということばはないのだ。

わしはいま、日本の宝石と美術品をわがものとす
るために、この魔力をつかおうとしているが、その
つぎには、日本そのものを、ぬすむかもしれない。
いや、世界をてんぶくし、世界をぬすむかもしれない
い。もつとちがったいいかたをすれば、地球全体
を、わしのものにしてしまうかもしれない。」

ニコラ博士は、うちようてんになつて、じぶんの
魔力をじまんするのでした。

小林君は、この会話を立ちぎきして、心の底から
おどろいてしまいました。

いかにも、だれのにせものでも、自由につくりだ
す力があれば、全世界をぬすむことだつて、できな
いことはありません。ああ、なんとというおそろしい
ことでしょう。

それにしても、その魔法の種のかくされている
「三重の秘密室」というのは、いったい、どこにあ
るのでしょうか。

小林君は、なんとかして、その「三重の秘密室」

にはいりたいとおもいました。

こんきよく、ニコラ博士をつけまわしていれば、
いつかは、その秘密室にはいるにちがいありませ
ん。小林君は、あいてにさとられぬように、ニコラ
博士を見はつてやろうと考えました。

それには、ゆつくりことをはこぶほかはありません。
このまま牢屋をからつぽにしておいては、にげ
だしたことを気づかれ、あいてを用心させてしま
ますから、ひとまず、牢屋にもどらなければなりま
せん。小林君は、針金のかぎで錠をひらいて、も
との牢屋の中にはいりました。

地下室には、夜も昼もありませんが、ニコラ博士
の手下が食事をはこんでくるので、だいたいの時間
がわかります。三度の食事がすめば、夜になり、見
まわりも、とだえますので、それをまつて、こつそ
り牢屋をぬけだし、ニコラ博士をみはることにしま
した。

小林君は、ニコラ博士の寝室をみつけたいとおも
いました。なんとなく、寝室のどこかに、「三重の
秘密室」への通路が、かくされているようにおもわ

れたからです。

やっと博士の寝室がみつかりました。おなじ地下室の一方のすみにある、小さな部屋で、ベッドと、つくえと、たんすがおいてあり、ニコラ博士は、その部屋で、ひとりで寝ることがわかりました。

ところが、この寝室に、ふしぎなことがおこったのです。

小林君がとらえられてから三日めの夜のことでした。ニコラ博士の寝室がわかったので、廊下のまがりかどにかくれて、そのほうを見はつていきますと、ニコラ博士が寝室へはいつていくのが見えました。

あとから、だれかくるといけないので、しばらく、ようすを見てから、寝室の前にいき、ドアのかぎ穴から、そつとのぞいてみますと、寝室の中には、人のけはいもありません。

ベッドの半分と、机と、いすが見えています、そこにはだれもいないのです。かぎ穴から、部屋のぜんぶが見えるわけではありませんけれど、なんとなく、からっぽの感じがするのです。

小林君は、おもいきつて、そつとドアをひらいて

みました。だれもいません。部屋の中へはいつて、ベッドの下、机の下、たんすのうしろなどを、のぞいてみました。やつぱり、だれもいません。

ふしぎです。ニコラ博士が、この寝室にはいつて、ドアをしめてから、ずつとドアを見ていました。博士が出ていけば、気がつかぬはずはありません。

壁か床に、秘密のぬけ穴でもあるのではないかと、さがしまわつていきますと、どこからか、ドドドド……と、地ひびきのような音がきこえ、寝室ぜんたいが、かすかに、ふるえているようなかんじがします。

地震かとおもいましたが、どうもそうではなさそうです。

そのうちに、ギョツとするようなことに気がつきました。

しまっている入口のドアが、グングン下へさがつていくのです。というのは、つまり、部屋の床が、上へ上へと、あがつていくことなのです。

そのうちに、下へさがつていつたドアが、すつかり見えなくなつたかとおもうと、こんどは、上のほ

うから、べつのドアがさがつてくるではありませんか。ドアだけではなく、壁もいっしょに、さがつてくるのです。

ああ、わかりました。このニコラ博士の寝室は、部屋ぜんたいが、エレベーターのしかけになってい
るのです。ドアがさがつたのではなくて、部屋その
ものが上にあがり、一階上のドアと、ピッタリ合う
ところで、とまったのです。

箱の中

この寝室は、まったくおなじ部屋が、上と下に二
重にくっついてい
るのです。

ニコラ博士がはいったのは、下の部屋でした。そ
れがエレベーターのしかけで、下へおりていって、
小林君がしのびこんだときには、いつのまにか、上
の部屋とかわっていたのです。

ですから、そこに博士の姿が見えなかつたのは、

なんのふしぎもありません。そのとき博士のいる寝
室は、地下室のもう一つ下の地下室、つまり地下二
階へおりていって、小林君がしのびこんだのは、そ
れとそっくりおなじにできている、上のほうの部屋
だったのです。

ニコラ博士は、寝室全体のエレベーターを、下に
おろして、地下二階へおりていったのにちがいあり
ません。しかし、そこには、いったい、なにがかく
されているのでしょうか。

これほど大じかけな、秘密の出入り口をつくつ
て、だれもはいれないようにしてあるところをみる
と、この地下二階には、よほどの秘密が、かくされ
ているのにちがいありません。

小林君は、それを考えると、なんだか、からだ
じゆうの、うぶ毛が、ゾーツとさかだつてくるよう
な、うにいわれないおそろしさをかんじました。
小林君のはいった部屋は、地下一階から、一つ上
にあがったのですから、いまいるところは、一階に
ちがいありません。

小林君は気がつきました。この部屋は、エレベー

ターじかけで、下におりても、地下一階までしかお
りないのですから、いつまでこの部屋にいても、地
下二階の秘密をさぐることはできないと、気がつい
たのです。

ですから、いま、この部屋のドアをひらいて、一
階に出て、ふつうの地下室におり、あの壁のボタン
をおして、秘密の出入り口から、地下一階におり、
ニコラ博士の寢室にしのびこむほかはありません。
つまり、この部屋の真下にある、そっくりおなじ、
もう一つの部屋に行くのには、そうするほかはない
のです。

そのみちで、ニコラ博士の部下にみつかつてはた
いへんです。小林君は用心のうえにも用心をして、
廊下から、廊下へと、しのび歩き、地下室の入口を
みつめて、そこにおり、がらくたものがおいてある、
つきあたりの部屋の壁のボタンをおして、地下一階
におり、ニコラ博士の寢室へ、たどりつきました。

上下に二つつながっている、おなじ部屋の上のほ
うを出て、大まわりをして、下のほうの部屋までき
たわけです。

かぎ穴からのぞいてみますと、だれもいません。
ニコラ博士は、地下二階におりて、用事をすませ、
地下一階にもどつて、部屋を出ていったのでしょ
う。ドアにはかぎがかかっています。

小林君は、また、針金をいろいろにまげて、錠前
やぶりをしなければなりませんでした。

五分ほどかかつて、やつとドアがひらきました。
部屋にはいつてドアをしめ、ベッドの下や、たんす
のうしろなどを、よくしらべましたが、どこにも人
間がかくれているようすはありません。

小林君は、もう一度、この部屋を地下二階におろ
して、その秘密をさぐりたいと思いましたが、ど
うすれば、下におりるのかわかりません。どこか
に、スイツチか、おしボタンがあるのでしようが、
それをさがすのがたいへんです。

しかし少年探偵の小林君は、こういうことになれ
ていました。かくしボタンなどは、どういう場所を
さがせばいいか、いままでのたくさんの経験で、だ
いたいわかっているのです。

それでも、かくしボタンをみつけるのに、八分ほ

どかかりました。入口のドアには、中から針金で、かぎをかけておいて、さがしまわったのですが、ふいに、だれかがやってきやしないかと、気が気ではありません。

でも、うまいぐあいに、かくしボタンがみつかりました。ベッドの下のジユウタンの一カ所が、プクツと小さくふくれているのに気づいて、足でふんでみますと、それがかくしボタンでした。やにわに、部屋全体が、ブルブルふるえだしたのです。つまり、エレベーターがおりはじめたのです。

やがて、エレベーターがとまるのをまつて、小林君は、針金のかぎで、ドアをひらき、そつと地下二階の廊下へふみだしました。

どこかに電灯はついているのですが、ひじょうにうすぐらくて、あたりのようすが、よくわかりません。

どこからか、つめたい風が、スーツとふいてきました。幽霊の手で顔をなでられたような気持です。

小林君は、ブルブルツと、身ぶるいして、そこに立ちすくんでしまいました。

なんともいえないぶきみさです。人間界をはなれて死の国にはいつてきたような、ふしぎなおそろしさです。

ここには、いつたい、どんな秘密が、かくされているのでしょうか。それを考えただけでも、心臓がドキドキしてきます。

そのうちに、目がなれてきて、あたりが見えるようになりしました。

コンクリートの壁、コンクリートの床、なんのかざりもない灰色の廊下が、つづいています。おつかなびつくりで、その廊下を、たどつていきますと、やがて、両がわに、たてにながいのロッカーが、ズラツとならんでいるところにきました。

ロッカーににているけれども、ふつうのロッカーよりは、幅が広く、人間ひとり、じゅうぶんはいれるほどの大ききで、なんだか、気味のわるいかつこうをしています。まるで、かんおけをたてにして、ならべたようなかんじです。

このふしぎなロッカーは、両がわに、あわせて三十個ほどならんでいましたが、そのとびらには、小

さいネーム・プレートがついていて、エナメルで、ローマ字と数字とが、T1、T2、S1、S2、A1、A2などと書いてあるのです。

小林君は、すぐ目の前のT1のとびらをひっぱってみましたが、かぎがかかっているときみえて、ひらきません。かぎがかけてあるからには、中になにかだいじなものがいれてあるのでしょうか。

それはなんでしょうか。こんなところに、ふつうのロッカーがあるはずはありません。その中にオーパーなんかははいっているとは考えられないのです。

では、なにがはいっているのでしょうか？

小林君は、なぜか、ゾーツと、からださがさむくなるような気がしました。針金を使えば、とびらをひらくのは、わけはありません。しかし、とびらをひらくのが、なんだかこわいのです。

でも、とうとう決心をして針金のかぎで、そのT1と書いてある、ロッカーのような箱のふたをひらきました。ひらいたかと思うと、

「あつー！」

とさけんで、まつさおになつて、ピシヤンとふたをしめてしまいました。

そこには、なんだか、へんなものがいたのです。気味のわるいものが立っていたのです。

それは人間でした。しかも小林君のよく知っている少年でした。

玉村銀一。そうです。少年探偵団員の玉村銀一君とそっくりの少年が立っていたのです。

銀一君が、どうして、こんな箱の中にとじこめられているのでしょうか。こうして立たされては、足がつかれてしまうでしょうし、ピツタリふたがしめてあるので、息もできないでしょう。じつにおそろしいごうもんです。

しかし、どうもへんです。小林君と顔を見あわせるとき、銀一君は、なにもいわないで、じつと立っていました。「小林さん」とさけんで、とびだしてくるはずではありませんか。それとも、銀一君は、立ったまま、気をうしなっているのでしょうか。

大秘密

小林君は、勇気をだして、もう一度箱のふたをあけてみました。

やっぱり、玉村銀一君です。いつも着ている服を着て、正面をむいたまま、まばたきもしないで、立っています。

「玉村君、きみは、玉村銀一君だね。」

声をかけても返事もしません。こちらの顔を見ようともしません。

小林君は、銀一君の腕に手をかけてゆすぶってみました。すると、銀一君のからだは、ユラユラとゆれたのですが、そのゆれかたがへんでした。

それは人間ではなくて、人形だったのです。プラスチックでできた人形だったのです。じつによくできていました。銀一君にそっくりです。

気がつくとき、人形の立っている足の下にひきだしが一つついていました。

それをあけてみますと、中に写真がたくさんは

いつているのです。

みんな玉村銀一君の写真です。顔と全身を、前から、うしろから、横からと、あらゆる角度からとつたものです。

ああ、わかりました。これらの写真をもとにして、この人形をつくったのです。これだけたくさんの写真があれば、銀一君とそっくりの人形をつくることもできるでしょう。

だが、なんのために、こんな人形をつくったのでしょうか。そこがどうもよくわかりません。

小林君は、ふと、みょうなことを考えました。超人ニコラ博士はにせものをつくったあとで、ほんもののほうは、人形にしてしまったのではないかということです。魔法つかいのニコラ博士にとつては、人間を人形にかえてしまうぐらいはわけのないことでしょう。

この、ロッカーみたいな箱の中には、ほかにも、たくさんの人形がはいつているのかもしれない。小林君は、いよいよ、気味がわるくなってきました。が、勇気を出して、針金のかぎで、つぎのT2のふ

たをひらいてみました。

その中には、美しい女の子が立っていました。まだあつたことはないけれども、銀一君のねえさんの光子さんかもしれない。光子さんにもせものにかわつてゐるらしいことは、玉村銀之助さんからきいていました。

そのつぎには、T3というふたをひらいてみました。

「おやつ、銀一君のおとうさんまで！」

そこに立っているのは、たしかに宝石王の玉村銀之助さんでした。

「すると、このあいだ銀座の店であつたのは、にせものだったのかしら。」

小林君は、小首こくびをかしげました。あれがにせものだったとは、どうにも考えられないのです。

そうです。あのときの玉村さんは、まだほんものでした。読者諸君は、よく知っています。玉村さんが、にせの小林少年のために、大時計の箱にとじこめられたのは、あれよりあとのことでした。

小林君が、このロッカーのような箱の中を見てい

るときには、まだにせものとのいれかえは、すんでいませんでしたが、人形のほうは、もうちゃんとできていたのです。

小林君は、こうなつたら、みんな見てやろうと、どきようをきめました。

そして、つぎにひらいたのは、T4のふたです。そこには、三十五―六歳の女の人が立っていました。小林君はあつたことがありませんが、これは銀一君のおかあさんらしいのです。

「おやおや、おかあさんまで、にせものといれかえるつもりだな。」

小林君は、思わず、つぶやきました。これで玉村さんの家族はぜんぶです。ニコラ博士は、玉村家の人をみんなにせものといれかえて、玉村家をとつてしまうのでしょうか。それを考えると、怪博士の、あまりの悪だくみに、小林君は、心の底から、ふるえあがつてしまいました。

こんどはS1のふたです。それをひらくと、銀一君よりはすこし大きい少年が立っていました。むろん人形です。小林君は知りませんでした。これは

白井美術店の子ども白井保君です。

つぎのS2の箱には、保君のにさんの人形が、S3、S4と、ひらくにつれて、保君のおとうさんをはじめ、白井家の人たちが、ズラツとならんでいるのです。小林君はその人たちを、ひとりも知りませんが、じつは、白井美術店の主人の家族ぜんぶが、そこに人形にされていたのです。

ニコラ博士は、こうして、玉村宝石店をのつとつたのおなじように、白井美術店ものつとろうとしているのにちがいありません。

そのつぎにはA1のふたをあけてみました。針金をカチカチやって、なんの気なしに、そのふたをひらいたのですが、ひらくと同時に、小林君は、目をまんまるにして、立ちすくんでしまいました。

ああ、なんとということでしょう。その箱の中には、もうひとり小林少年が立っていたではありませんか。顔もおなじ、服もおなじ、まるで鏡にでもうつったように、ふたりの小林君が、むかいあつて立っているのです。

小林君は、おどろいてしまいました。じぶんと

そつくりのやつが、こつちをにらみつけているのです。小林君は、こわい目をして、相手をにらんでやりました。しかし、人形は、いつこうにへいきです。そしてながいあいだ、小林君と小林君との、ふしぎなにらみあいがつづきました。

小林君が牢屋にいれられたとき、ニコラ博士がやってきて、

「きみのにせものが、外ではたらいっている。そのあいだ、ほんもののきみは、ここにとじこめておくのだ。」

といいました。では、この人形が、そのにせものなのでしょうか。

いや、そうではありません。にせものは、どこかで、生きて動いているはずです。すると、この人形は、なんのために、つくられたのでしょうか。

小林君は、しばらく考えていましたが、やがて、そのわけがわかりかけてきました。

「ああ、そうだ。まずぼくの写真をあつめたにちがない。ぼくの知らないまに、だれかがとつたのだ。」

ねんのために、人形の足の下のひきだしをあげてみますと、小林君の写真が何十枚もはいつていました。顔だけのもの、全身のもの、前から、うしろから、横からと、あらゆる方角からとつた写真がたくさん出てきたのです。

「この写真をもとにして、プラスチックの人形をつくつたのだ。この人形が、いわば原型なんだ。そして、なにかの魔法で、原型のとおり、生きた人間をつくり出すのだ。」

つまり、ほんとうのぼくと、人形とにせもののぼくと、三人のぼくがいるわけだな。」

小林君は、そう考えて、ひとり、うなずくのでした。

「じゃあ、つぎのA2の箱には、だれがはいつているのだろう。」

やつぱり、あけてみないではいられません。

小林君は針金でかぎ穴をカチカチいわせて、そのふたをひらきました。

「あつ、先生！」

とんきような声をたてたのも、むりはありません。

ん。そこには、名探偵明智小五郎が、にこやかにほほえみながら立っていたのです。

むろん人形です。足の下のひきだしをひらいてみると、やつぱり、明智先生のいろいろな写真が、どつさり、そろつていました。

「すると、あいつは、明智先生のにせものも、つくる気なんだな。」

小林君は、なんだかこわくなってきました。明智先生は、まだ北海道からおかえりにならないが、ひよつとしたら、旅さきで、とつくに、にせものとかわっているのではないだろうかと思うと、ゾーッとしないではいられませんでした。

小林君は、それから、つぎつぎと、箱をひらいてみました。あとには、見知らぬ人形が五つほど、はいつていたばかりで、そのほかの箱は、ぜんぶからっぽでした。これから、べつの人形をいれるために、のこしてあるのでしょうか。

小林君は、人形箱を見てしまうと、つぎの秘密が、知りたくなりました。これらの人形をもとにして、どうして、にせの人間をつくるのか、その秘密が、

やつぱり、この第三の地下室の中に、かくされてい
るにちがいないのです。

ロッカーのような人形箱のやらんだ、せまい廊下
を、まっすぐにいきますと、そのつきあたりに、が
んじょうなドアが、しまっていました。

ドアに耳をつけてみましたが、なんの音もせ
ず、シーンと、しずまりかえています。

かぎ穴からのぞいてみました。

あつ、なんとというあかるさ！ まるで、まっぴる
まの原っぱのようです。しかし、そこは地下二階で
すから、太陽の光がさしているはずはありません。
やつぱり電灯でしょう。おそろしくあかるい電灯
が、部屋じゆういっぱい、かがやいているのです。

小林君は、また針金のかぎを、使いました。すこ
してまどりましたが、とうとうドアがひらき、小林
君は、広い部屋の中に、ふみこみました。

そして、おどろきのあまり、あつと、たちすくん
でしまいました。

そこは、絵でも写真でも、一度も見たことのない
ような、ふしぎな機械の部屋でした。あらゆる形の

機械が、部屋じゆうに、みちあふれているのです。

いっぽうには、手術台のようなものがあり、その
そばのガラス戸だには、キラキラひかるメスや
ハサミや、そのほかさまさまのおそろしい道具が、
いっばいならんでいました。

いっぽうには、歯科医の治療台のようなものが、
いくつものならび、また、べつのすみには、大きな化
学の実験台があつて、その上に、あらゆる形のガラ
スの道具がならび、ガスの炎ほのおの上の、まるいガラス
ビンの中には、血のような液体が、フツフツとあわ
だっているのです。

あつ先生っ！

小林君は、びつくりして、たちすくんでいました
が、すると、むこうの機械のあいだから、みような
人間が、あらわれてきました。

頭は、かみそりできれいにそつた、まるぼうずで

す。顔はしわだらけで、ひろいひたいの下に、まんなるな目がギョロツと、ひかっています。

まゆ毛は、ひどくうすいので、あるのかないのかわかりません。ひらべったくて、ペシヤンコの鼻、その下に、大きな赤いくちびるが、まるで虫のように、モグモグうごいています。

服は青いもめんの労働服で、その上にまっ白な手術着のようなものを、はおっています。

子どものように背がひくくて、その胴体の上に、じいさんの首がのついているという、ふしぎな人間です。一寸法師いっすんぼうしという、かたわものなのでしょう。

そいつは、ニヤニヤわらいながら、こちらへちかづいてきました。そして、まっかなくちびるを、大きくひらいて、こんなことをいいました。

「おお、よくきた。おまえは、わしのつくったA1号だな。」

そして、つくづく小林君の顔を、ながめながら、「うん、よくできた。A1号の写真とそっくりじゃ。

だれも、おまえを見やぶるものはあるまいて。ウフフフフ、おまえは、わしの傑作じゃよ。」

小林君は、しばらくかんがえていましたが、やがて、一寸法師のいつていることが、わかつてきました。A1号というのは、あの小林君とそっくりの人の形が、はいつていたロッカーの番号です。

まず小林君のいろいろな写真をあつめ、それによつてあの人形をつくり、その原型から、小林君とそっくりの生きた人間を、つくりだしたのに、ちがいありません。

しかし、どうして、そんなことができるのでしょうか。このぶきみな一寸法師は、魔法つかいなのでしょうか。

超人ニコラ博士は、どんな人間にも、ばけることができます。では、この一寸法師も、やはりニコラ博士の、べつの姿ではないのでしょうか。

「あなたはニコラ博士ですか。」
小林君は、そうたずねてみました。

「わしはニコラではない。」
一寸法師がこたえました。

「では、あなたはだれです。」
「さあ、だれじやつたか。わしはわすれたよ。」

なんだかへんです。この一寸法師は、自分がだれだったか、忘れてしまったといっているのです。

「あなたは、ぼくをつくったといいましたね。どうして、そっくりおなじ人間が、つくれるのですか。あなたは魔法つかいですか。」

小林君は、そんなことをたずねないではいられませんでした。すると、一寸法師は、大きな口をあいて、歯のない歯ぐきを見せて、うすきみわるく、わらいました。

「ウフフフフ、魔法つかいか。そうじゃ、魔法つかいといつてもいい。だが、わしは医者だよ。魔法のような医術をつかうのじゃ。医術によつて人間をつくりかえるのじゃ。つまり、わしは世界にたったひとりしかない魔法医者なのじゃ。」

小林君は、そんなばかなことができるとおもいません。この一寸法師は、とんでもないホラぶきか、気がいかか、どちらかにちがいありません。「ウフフフフ、みような顔をしているね。きみは、わしの手術をうけたことを、わすれてしまったのか。よろしい。それじゃあ、きみにあわせる人があ

る。きみはたしか、名探偵明智小五郎の助手じゃったね。ちよūdい。まあ、こちらへきて見るがい。」

一寸法師のみじかい手が、小林君の手をにぎつて、グングンむこうへ、ひっぱっていくのです。ゴチャゴチャした機械のあいだをとおっていくきみすと、白い手術台のならんだところへ出ました。

一つの手術台に、だれかがよこたわっています。モジャモジャにみだれた髪の毛が見えています。

「もう麻酔がさめたころだ。きみ、気分はどうだね。」

一寸法師が、ねている人の顔を、のぞきこんで、はなしかけました。

すると、その人はパツチリ目をひらいて、ふしぎそうに、あたりを見まわしています。

「あつ、先生！」

小林少年は、ときような声をたてて、手術台にかけよりました。

そこにねていたのは、名探偵明智小五郎だったので。いや、明智探偵とそっくりの人間だったので

す。

ほんとうの明智探偵は、まだ北海道からかえりません。こんなところにねているはずはないのです。

これは、A2という番号のロッカーの中にあつた、明智とそっくりの人形をもとにして、一寸法師の魔法医者がつくりだした人間にちがいありません。

そこにねている明智探偵は、小林君が「先生つ」とさげんで、ちかづいても、べつにおどろくようすもなく、知らん顔をしています。にせものですから、まだ小林君を知らないのです。

「A2号ですね。」

小林君が、ニヤツとわらつていいました。すると一寸法師は、

「そうじやよ。つまり、明智探偵がふたりになつたというわけさ。」
とこたえました。

「人形もいれると三人ですね。」

「ウフフフ、そうじや、そうじや。おまえ、なかなか、かしこいのう。」

そういつて、一寸法師は、みじかい手で、背のびをしながら、小林君の頭をなでるのでした。

一寸法師は、からだのかっこうが、へんなばかりでなく、いうことも、なんだかおかしいのです。がちがいかもしれません。しかし、がちがいに、どうして、こんな人間製造ができるのでしょうか。じつに、ふしぎというほかはありません。

小林君が、なおも質問しようとしていきますと、そのとき、部屋の入口のほうに、人の足音がして、だが、こちらへやってくるようです。

小林君はびつくりして、機械のかげに身をかくして、そのほうをながめますと、白ひげのニコラ博士が、こちらへやってくるのが見えました。

みつかつては、たいへんです。小林君は、あわてて、機械と機械のすきまを、おくふかく、にげこむのでした。

さて、それから、どんなことがあつたか。小林君は、ニコラ博士にみつかることもなく、ながいあいだ、その機械室にいて、一寸法師の魔法医者の秘密を、すっかりききだしてしまいました。

それから三日のあいだに、小林君は、ニコラ博士の洋館のすみずみまで、のこるところなく、しらべあげました。

地下一階の牢屋のような鉄ごうしの中にとじこめられた、玉村宝石王一家、白井美術店一家の人たちとも、こつそり話をして、すべての事情を知ることができました。

それだけでなく、小林君は、いかにも明智探偵の弟子らしい、おもしろいトリックを考えて、それをやってみることにしました。

そのトリックとは、いったい、どんなことだったのでしょうか。

いや、それよりも、一寸法師の魔法医者は、どのような方法によって、同じ人間をつくりだすことができたのでしょうか。

三方からピストルが

お話かわって、こちらはほんものの明智探偵です。小林君がニコラ博士にとらえられてから一週間ほどのち、明智探偵は北海道の事件をしゅびよく解決して、その日の午後、羽田空港はねだにつきました。

電報がうってあつたので、小林君が自動車でむかえにきていました。そして、小林君と、もうひとり、三十歳ぐらいの見知らぬ男が、探偵のそばへよつてきました。

「先生、おかえりなさい。事件がうまくかたづいたそうで、おめでとうございます。」

小林君があいさつをしますと、明智もニコニコして、

「うん、ありがとう。……で、その人は？」

と、見知らぬ男を目でさししめして、たずねました。「こんどたのんだ先生のボディガードです。くわしいことは、あとでおはなしします。先生、こちらにも、ふしぎな事件がおこっているのです。先生のおかえりをまちかねていました。」

「そうだってね。おもしろい事件らしいじゃないか。」

「ええ、これまで一度も手がけたことのない、ふしぎな事件です。事務所へかえってから、ご報告します。」

そして、三人はまたせてあつた自動車にのりこみました。小林君が右がわに、見知らぬ男が左がわに、明智探偵を中にはさんで、こしかけたのです。

運転手も見かけたことのない男です。明智はちよつと、へんに思いましたが、車は事務所専用の「アケチ一号」ですし、小林君がついているので、べつに、ふかくもうたがいませんでした。

車は京浜国道を三十分もはしつたかとおもうと、さびしい横町へまがりました。

「道がちがうじゃないか。」

明智探偵が、そういつて、思わず腰をうかそうとしました。ハツと危険をかんじたからです。でも、小林君がいるのに、こんなみょうなことがおこるのはなぜだろうと、ふしぎに思いました。

ところが、明智が腰をうかしたときには、右手は小林君に、左手は見知らぬ男に、かたくにぎられて、うごきがとれなくなっていました。

「ぼくをどうしようというのだ。小林君、きみまでが……。」

ときげんで、小林少年の顔をにらみつけますと、おどろいたことには、その小林君が、ふてぶてしくわらいながら、こんなことをいうではありませんか。「ウフフフ、よくにているだろう。だが、おれは小林じゃないのさ。小林とそっくりの別の人間なのさ。ほんとうのことをいうとね、おれたちはみんな、超人ニコラ博士の手下なのさ。おつと、明智先生が、いくらつよくつてもだめだよ。こちらには、これがあるんだからね。」

と、いつたかと思うと、小林君によく似た少年と、見知らぬ男とが、左右からピストルをつきつけ、運転手も車をとめて、うしろをふりむくと、右手をグツとこちらに出して、やつぱりピストルを、さしむけるのでした。

こうして明智探偵は、目かくしをされ、さるぐつわをはめられ、両手をうしろにしばられて、もう、身動きもできなくなっていました。

それから、また四―五十分もはしつて、車がつい

たのはニコラ博士の怪洋館でした。

明智探偵は三人につれられて、地下室から、第二の秘密室へ、そして鉄ごうしの牢屋の中へ、ほうりこまれてしまいました。

替え玉の替え玉

明智探偵が牢屋へいれられて、しばらくすると、白ひげのニコラ博士が、ゆうぜんと、地下室の見まわりにやってきました。そのうしろから、さっきの小林君によく似た少年がしがつています。

玉村宝石店の親子四人がとじこめられている鉄ごうしのまえを、とおりすぎました。かわいそうに、四人のものは、部屋のすみにうずくまって、だまって、うなだれています。

そのむかいがわには、白井美術店の家族が、とじこめられ、おなじようにうなだれていました。

それから十メートルほどむこうに、小林少年のい

る牢屋があります。ニコラ博士とにせの小林君が、そのまえをとおりかかると、鉄ごうしの中から、おそろしい声がひびいてきました。

「ニコラ先生、おれをここから出してください。おれはにせもののほうだ。そこにいるのが、ほんものの小林だ。小林がおれをここへとじこめて、じぶんはにげだしてしまつたのだ。そして、にせものになりすましているのだ。」

ニコラ博士は、それをきいても、べつにおどろきません。小林君から、わけを知らされているからです。

「ね、そうでしょう。さすがは小林の知恵です。うまいことを考えました。ほんとうの小林が、どうかして鉄ごうしをあけて、にせものを引きいれ、替え玉の入れかえをやつたというのです。だから、じぶんを牢から出して、かわりに、ぼくを入れようというのですよ。しかし、あいつはうそをついているにきまっています。なぜといって、ほんものの小林は、あいかぎを持つていないので、牢から出られっこないのですからね。かぎは、このにせの小林が、ちや

んところして、もっているのですからね。」

牢屋の外の小林は、そういつて、ポケットからかぎたばをとりだし、チャラチャラと音をさせてみせました。

へんなことになってきました。ニコラ博士は知りませんが、読者諸君は知っています。小林君は、針金をつかつて、じゆうじぎいに、鉄ごうしの錠をあけることができます。それを、牢屋の外にいる小林君は、あいかぎがなければ、あけられないなど、うそをついているではありませんか。

牢屋の中にいる小林よりも、外にいる小林のほうが、あやしいのではないのでしょうか。つまり、中の小林が、じつはにせもので、外的小林がほんものではないのでしょうか。なんだかややくいしいことになってきました。

しかし、もし、外にいる小林がほんものだとすると、明智探偵を自動車にのせて、とりこにし、この地下室の牢屋へ入れたのは、どういうわけでしょうか。ほんもの小林君なら、あくまで明智探偵のみかたをするはずではありませんか。

なんだかわけがわからなくなってきました。もうすこし、ようすを見ることにしましょう。そうすれば、やがてハッキリしたことがわかるでしょう。

さて、ニコラ博士と小林君とは、牢屋の見まわりをすませて、一階へあがつていききましたが、しばらくすると、こんどは、小林君だけが、こっそり地下室へおりてきました。そして、あの小林の牢屋の前をとおりかかると、またしても、中から、どなり声がかきこえてきました。

「やい、そこへいくほんもの小林。うまく博士をごまかしたな。だが、きさまのうそが、いつまでもつづくはずはない。きつとそのうちに、見やぶられる。そのときは、どんなひどいめにあうか、かくごしているがいい。おれはきつと、きさまといれかわつてみせるぞつ。」

中の小林は、鉄ごうしにすがりついて、ガタガタいわせながら、しきりに、どくぜつをたたいいます。

外的小林君は、それをあいてにしないで、牢屋の前を通りすぎ、ニコラ博士の寝室へしのごみまし

た。ここのかぎだけは、ニコラ博士がはなしませんので、小林君は、やつぱり、針金をつかつてドアをひらかなければなりませんでした。

小林君は、エレベーターのかくしボタンをおして、地下二階へおり、A2のロッカーから、明智探偵とそっくりの人形をとりだし、それをこわきにかかえて、もとの地下一階にもどり、さつき明智探偵をとじこめた牢屋へといそぎました。

エレベーターから、明智の牢屋へ行くのには、ほかの牢屋のまえをとおらなくてもよいので、人形をだいているのを、気づかれる心配はありません。

その鉄ごうしのまえへいくと、明智探偵は部屋のまんなかすわつて、おそろしい顔で、こちらをにらみつけていました。

小林君は、鉄ごうしに顔をくつつけて、ささやきました。

「先生、ぼくはほんとうの小林です。ぼくは一度牢屋へいれられたのですが、そこをぬけだし、うまくだまして、にせものと入れかわったのです。そして、ぼくは、ニコラ博士のみかたのにせものになり

すましたのです。つまり替え玉の替え玉になったわけです。

さつきは、先生にピストルなどむけて、ごめんなさい。ああして、にせもののように見せておかないと先生をおたすけすることができないからです。

ニコラ博士は、ぼくをにせものと信じていますから、ぼくに牢屋のかぎをあずけました。ですから、この鉄ごうしをひらくのは、わけもないのです。」

小林君は、素晴らしいながら、かぎたばをとりだして、鉄ごうしのドアをひらき、中へはいつて、部屋のおくにしているあるごさの上に、いまもつてきた明智探偵とそっくりの人形をよこたえ、もう一枚のごさを、胸のへんまでかけました。こうしておけば、外から見たのでは、明智探偵がねているとしか思えませんから、ほんとうの明智がにげだしてしまつても、しばらくはだいじょうぶです。

「さあ、先生、にげましょう。とちゅうで、だれかに見つかるとういへんですから、そういうときには、いそいで、廊下のくらいところへ、かくれなければなりません。しかし、ぼくは、じゅうぶん、に

げ道をしらべておきましたから、まず、だいじょうぶだと思えます。」

明智探偵といっしよに、外に出ると、小林君は、鉄ごうしのドアをしめて、かぎをかけました。そして、うすぐらい廊下の、壁をつたうようにして、秘密の地下室から、ふつうの地下室へ、それから一階へと、足音をしのばせて、いそぐのでした。

さいわい、だれにも見つからず、洋館の外に出ることができました。それから、さびしいやしき町を、はしるようにして大通りに出ると、タクシーをひろつて、こういうときに、いつもつかう、渋谷駅ちかくの目だたない旅館へといそぎました。

旅館の一部屋へおちつくと、小林君は、これまでの、いっさいのことを、明智先生に話しました。

「いま午後四時半ですね。じつは今夜、おそろしいことがおこるのです。まだじゆうぶんまにあいます。それをふせがなければなりません。一寸法師の魔法医者は、先生とそっくりの人間をつくりました。そいつが明智探偵としてはたらくのです。

ぼくはニコラ博士のみかたの、にせ小林だとお

もわれていたので、かれらの秘密のたくらみは、みんなきいてしまいました。ですから、今夜のことも知っているのです。」

そして、小林君は、そのおそろしいたくらみというのを、くわしく話してきかせるのでした。

青い炎

小林少年が、ニコラ博士のとりことなつた明智探偵をたすけだして、ニコラ博士のおそろしいたくらみを話してきかせた、あの日の夕方のことです。

お話かわつて、世田谷区せたがやのやしき町に、広い邸宅をもっている、園田大造そのだたいぞうというお金持ちから、明智探偵事務所へ電話がかかつてきました。

「明智先生ですか、ひじょうに重大な事件で、ご相談したいのですが、すぐ、わたしのうちまでおいでねがえませんか。」

園田さん自身が電話口に出て、声をふるわせてた

のんでいるのです。

「重大な事件というのは、いったい、どんなふうな事件でしょうか。」

明智がたずねますと、

「いや、電話では話せません。ぜひ、お目にかかってお話ししたいのです。おそろしい事件です。先生のお力をかりなくては、どうにもならないのです。先生のごことは、友人の菅原君の宝石事件で、よくぞんじております。どうか、わたしを助けてください。」

そうまでいわれては、たのみをきかないわけにはいきません。明智探偵は、すぐおうかがいするといつて、電話をきりました。

それから一時間ほどして、園田さんの大きなやしきの洋風応接間に、主人の園田さんと、明智探偵と、助手の小林少年がテーブルをはさんで話しあっています。

「すると、あいては、ニコラ博士ですね。」

明智が、しんげんな顔で、ききかえしました。

「そうです。わたしは毎朝、五時におきて、庭を散歩するのですが、けさ、庭を歩いていますと、木の

間にあいつが立っていたのです。長いひげをはやした、七十歳ぐらいのじいさんです。そいつのからだは、青く光っていました。まだうすぐらい木のしげみの中ですから、幽霊のように、青く光っているのが、よくわかるのです。わたしは、びっくりして、にげだそうとしましたが、催眠術でもかけられたように、足が動かなくなつて、にげることができせん。

そいつは、じつと、わたしの顔を見つめながら、地の底からひびくような、気味のわるい声で、こんなことをいいました。

『わしは、おまえのだいじにしているダイヤモンド『青い炎』がほしいのだ。こん夜、かならずもらいにくるから、用心するがいい。だが、おまえがどんなに用心しても、わしは魔法つかいだから、かならず、とつてみせるよ。』

そういつて、ウフフと笑つたかとおもうと、そのヒノキのみきにつかまつて、まるでサルのように、スルスルとのぼつていき、木の葉の間に、姿が見えなくなつてしまいました。先生、それから、お

そろしいことがおこったのです。」

園田さんは、そこでちよつとことばをきつて、おびえたような目で、窓の外の空をながめました。

「ヒノキのてつぺんから、あいつが、空へとびたつたのです。そして、朝やけの空を、アメリカのスーパーマンのように、両手を前につきだして、マントをヒラヒラさせて、ひじょうな速さで空中をとびさつてしまったのです。」

園田さんは、まつきおな顔になっていました。

「ニコラ博士が空をとぶことは、ぼくもきいております。それについて、ぼくはある考えをもっているのですが……。ところで、そのあなたのダイヤモンドというのは、どこにおいてあるのですか。」

明智がたずねますと、園田さんは、なぜかニヤリと笑つて、

「それはだれも知りません。わたしのほかには、だれも知らないのです。しかし、あいつはスーパーマンみたいなやつですから、宝石のかくし場所を知っているかもしれません。」

このダイヤモンドには『青い炎』という名がつい

ているのです。インドの仏像のひたいに、はめこんであつたのを、あるイギリス人が手にいれて、それがまわりまわつて、わたしのものになったのです。青い炎がもえるように、かがやいているので、そういう名がついたのです。二十五カラットもある大きなもので、日本では最大、最高のダイヤです。ですから、わたしは、これを、ぜつたいにわからないある場所にかくし、うちのものにも見せないようにしているのです。まして、他人には一度も見せたことがありません。

じつは、二―三日前に、ある有名な宝石商が、日本じゅうの宝石をあつめて、宝石展覧会をひらきたいから『青い炎』を出品してくれないかといつてきたのですが、わたしは、ぜつたいに人に見せるつもりはないといつて、かたくことわつたほどです。」

「そうですか。それほどの宝物でしたら、ぼくも、全力をつくして、おまもりしますが、そのダイヤモンドは、いつたい、どこにかくしてあるのでしょうか。それをうかがつておかないと、まもるにもまもれないのですが。」

明智のことばに、園田さんはうなずいて、

「ごもつともです。先生にだけは、かくし場所を、おおしえするほかありません。いま、そこへごあんないしますから、どうかこちらへおいでください。」
といて、いすから立ちあがり、園田さんは、女中さんをよんで、明智探偵と小林少年のくつを、庭のほうへ、まわすようにいつけておいて、廊下を、さきに立つてあるいていきました。

廊下を二つほどまがると、庭へおりのドアがひらいていて、三人はそこからおりていきました。

池や林のある、広い庭です。林の中を通りすぎると、ちよつとした広っぱがあり、そこにお寺のお堂のようなものが立つていました。

「わたしの持仏堂じぶつどうですよ。この中に、平安朝時代へいあんちようの黄金仏が安置してあるのです。」

園田さんはそういつて、お堂のとびらをひらき、ふたりに中にあんないしました。

うすぐらいお堂の中には、まんなかに大きな台があつて、その上に、人間の倍もあるような、金色の仏像が立つていました。その台のまわりはグルツと

石だたみでかこまれ、仏像を横からでも、うしろからでも見られるようになっていたのです。

「うまいかくし場所でしょう。この仏像は国宝です。だれも国宝に傷をつけるなんて、考えもしないでしょう。ところが、わたしは傷をつけたのです。この仏像の背中に、十センチ四方ほどの、小さなきりくわせをつくつて、それを宝石箱にしたのです。外から見たのでは、ちつともわかりません。こちらへきてごらんさい。」

園田さんは仏像のうしろへまわりました。明智探偵と小林少年も、そのあとについていきましたが、仏像の背中のどこに、秘密のかくし場所があるのか、すこしもわかりません。

「このボタンをおせばいいのです。」

園田さんは、仏像の右のものにある、ちよつと見たのでは、わからないほどの、イボのようなものを、グツとおしました。すると、カタンと音がして、仏像の背中の四角いふたがひらいて十センチ四方ほどの穴があきました。

「この中に宝石がはいっているのです。だが、まっ

てください。むやみに手をいれてはあぶない。どろぼうの用心がしてあるのです。宝石をどうとうとして、手をいれると、穴の四方から、するどい鉄のツメが、サツととびだして、手にささり、どろぼうは動けなくなってしまうのです。

それをふせぐのには、もうひとつのかくしボタンをおせばよろしい。」

園田さんは、こんどは仏像の左のもの、やはり小さなイボのようなものをおしました。

「さあ、これで、もうだいじょうぶ。」

といいながら、穴の中へ手をいれて、ダイヤモンド「青い炎」をとりだし、明智探偵に見せるのでした。

ああ、なんとというみごとな宝石でしょう。虹にじのように七色にかがやいているのですが、青の色がいちばんつよく、ほんとうに、青い炎がもえているようです。

「ぼくも、いろいろな宝石を見ましたが、こんなりっぱなのは、はじめてです。なるほど日本一のダイヤモンドですね。」

明智探偵も、思わず、ほめたたえないではいられ

ませんでした。

「だから、ニコラ博士が目をつけたのですよ。だいじょうぶでしょうか。あいてはおそろしい魔法つかいですからね。」

園田さんは、心配そうです。

「ぼくがおひきうけしたら、だいじょうぶです。ぼくは魔法つかいというやつには、たびたび出あつたことがあります。一度も、やぶれたことはありません。あいてが魔法をつかえば、こちらも、それ以上の魔法をつかうからです。」

明智探偵の力づよい返事に、園田さんは、安心して、そのふたをしめました。

「ぼくは、いまから、夜にかけて、ずっと見はりをつづけましょう。しかし、このお堂の中にいたのでは、ダイヤはここにかくしてありますと、敵に知らせるようなものですから、ぼくと小林はお堂のそばの庭にかくれて、見はりをつづけます。もしニコラ博士がやってきたら、かならず、つかまえてお目にかけます。ここはぼくたちにまかせて、あなたは、

うちにおもどりになつてゐるほうがよろしいでしょう。」

園田さんが、うちの中へもどるのをまつて、小林少年は、明智探偵になにかさきやいたうえ、電話をかけるために、おもやへはいつていきましたが、それは、少年探偵団のおもな団員を、よびあつめるためでした。それから一時間もしますと、十人の団員が、園田さんの庭へ、つぎつぎと、あつまつてきて、あちらこちらの木かげに身をかくして、ニコラ博士のやつてくるのをまちうけました。この少年たちは、このあいだ芝公園で、ニコラ博士にひどいめにあつてゐるので、きようは、そのしかえしをしてやろうと、はりきつてゐるのです。

ふたりの明智小五郎

そして、日がくれ、だんだん夜がふけていきました。

夜の十時に、園田さんに電話がかかつてきました。

「わしがだれだか、いわなくても、わかつてゐるじやろう。うん、そのとおり、わしはニコラ博士じや。きみのダイヤモンドは、明智小五郎が見はりをしてゐるね。いい人をたのんだものじや。なにしろ日本一の名探偵じやからなあ。

だが、だいじようぶかね。わしは魔法つかいじやよ。もうとつくにダイヤモンドを、ぬすんでしまつたかもしれないぜ。え、どうだね、心配ではないかね。ウフフフ、ほうら、見たまえ、きみは声があるえてゐる。心配になつてきた。

ダイヤモンドは、かくし場所にあるだらうか。いや、ないのだ。あのかくし場所は、からつぽだ。うそだと思ふなら、いますぐ、あそこへいつて、しらべてみるがいい。ウフフフフ……。」

そして、ガチャンと電話がきれました。

園田さんは、受話器をおいたまま、まつさおになつて、その場に立ちすくんでいましたが、庭の持仏堂へいつてみないでは、どうにも安心ができません。

ん。

懐中電灯をもって、えんがわから庭げたをはいで、あの黄金仏のお堂の前につけました。

「明智先生、明智先生はいませんか。」

大きな声でよびますと、お堂のそばのしげみの中から明智探偵と小林少年が出てきました。ちょうど月夜で、そのへんは昼のように明るいです。

「どうなすつたのです。なにかあったのですか。こちらは、べつにかわつたこともありませんが。」

明智ののんきなことばに、園田さんははらだたしげに、どなりつけました。

「ニコラ博士が電話をかけてきたのです。そして、ダイヤは、とつくにぬすんでしまったというのです。明智さん、しらべてください。ダイヤがかくし場所にあるかないか、しらべてみてください。」

「そんなばかなことがあるものですか。ぼくはお堂の入口をずっと見はっていました。お堂のとびらは、一度もひらかなかつたのです。だから、ダイヤをぬすみだせるはずがありません。」

「ともかく、しらべてみましょう。いっしよにきて

ください。」

園田さんは、いいすて、お堂のとびらをひらくと、その中へとびこんでいきます。しかたがないので、明智探偵と小林少年も、そのあとからついていきました。

園田さんは仏像のうしろへまわると、かくしボタンをおして、秘密のふたをひらき、もうひとつのボタンをおして、鉄のツメがとびださないようにしておいて、穴の中へ手をいれました。

「あつ、ない。なくなっている。明智さん、この中はからっぽですよ。」

明智探偵をしかりつけるように、さげびました。「おかしいですね。ニコラ博士は、このかくし場所を、知らないはずじゃありませんか。それをどうして……。」

「だから、はじめから、もうしあげておきました。あいつは魔法つかいです。どんなことだつてできるのです。それをふせいでくださるのが、あなたの役目ではありませんか。しかも、あんなにかたく、おひきうけになつたではありませんか。」

園田さんに、つめよられて、明智探偵はタジタジとあとじさりをしていました。

そのときです。じつにふしぎなことがおこりました。とびらをひらいたままになっているお堂の入口に、みような人間が立っていたのです。

銀色の月の光が、横のほうから、その人の顔の半分を、てらしていました。

園田さんも、明智探偵も、その顔を見ると、あつとさげんだまま、立ちすくんでしまいました。

その人は懐中電灯を持っていました。その光をこちらにむけながら、ゆつくりとお堂の中へはいってきます。

こちらの三人は、思わずあとじさりをしながら、園田さんの懐中電灯は、しぜんに、そのふしぎな人間の顔をてらしました。

あいての懐中電灯は、明智探偵の顔をてらしていません。

人間の倍もある金色の仏像の前に、おたがいに懐中電灯でてらされた二つの顔が、まっ正面にむきあっていました。

おお、ごらんなさい。その二つの顔は、まるで鏡にうつしたように、そっくりおなじではありませんか。

そうです。明智探偵がふたりになったのです。どちらかが、ほんもので、どちらかが、にせものにながいありませんが、その見わけが、まったくつかないのです。

「ワハハハハ……、にせものの明智君、うまくばけたね。しかし、きみはニコラ博士の手下だ。ダイヤモンドをまもるのではなくて、それをぬすむためにやってきたのだ。そして、きみはもうぬすんでしまったのだ。」

あとからきたほうの明智が、そういって、カラカラと笑いました。

しかし、前からいる明智も、けつしてまけてはいません。

「なにをばかな。きみこそにせものだ。いまごろになつて、ニコノコやってきたのが、にせもののようにこじやないか。」

だが、うたがうなら、ぼくのからだをさがしてみ

るがいい。あんな大きなダイヤだから、ぼくが持つていけば、すぐにわかるはずだ。」

それをきくと、小林少年が、お堂の入口へかけていつて、用意していた、呼び子の笛をとりだすと、ピリピリピリリリリリ……と、はげしくふきならしました。

この小林少年は、ほんものなのだろうか、それとも、にせものなのだろうか。読者諸君は、もうおわかりになつているでしょうかね。

それはともかく、呼び子の音に、庭のあちこちにかくれていた十人の少年探偵団員が、大いそぎでかけつけてきました。

少年たちはお堂の入口にむらがつて、中をのぞきこみましたが、明智先生がふたりいるのを見ると、ギョツとして、ものもいえなくなつてしまいました。

「やあ、少年探偵団の諸君だね。ここにいるぼくとそつくりのやつは、にせものだ。こいつは大きなダイヤモンドをぬすんだのだ。きみたちみんなで、こいつのからだをしらべてくれたまえ。どこにかかく

しているにちがいないのだから。」

あとからきた明智がいいますと、さきにきていた明智もまけないで、少年たちに声をかけました。

「やあ、きみたち、ゆだんをしてはいけません。いましやべつたやつが、にせもので、ニコラ博士の手くだよ。」

しかし、ぼくのからだをさがすなら、さがしてもよろしい。ぼくはぬすみななか、ぜつたいにしないのだから。」

すると、小林少年が、さきにたつて、その明智のポケットなどを、さがしはじめましたので、少年たちも、四方から明智のからだにとりついて、上着とズボンをさがしたあとで、その上着とズボンを、よつてたかつて、ぬがせたうえ、シャツとズボン下だけになった明智を、とうとうその場にころがしてしまいました。

いくら子どもでも、小林君をまげて十一人ですから、どんな力のつよいおとなだつて、どうすることもできません。十一人にとりつかれては、まるでアリのたかられたコオロギのようなもので、されるま

まになつてゐるほかはないのです。

「ないねえ。」

「ないよ。」

「先生、どこにもダイヤなんて、かくしていません。」

あらゆる場所をさがしたあげく、少年たちは、とうとう、かくしていませんときめてしまいました。

「そうらみる。ぼくがぬすみなんかするはずはない。なぜといつて、ぼくこそほんとうの明智小五郎だからだ。そこにゐるやつが、にせものだよ。」

シャツ一枚にされた明智が、それみろといわぬばかりに、とくいらしくいいました。

それをきくと、小林君が、ハツとなにかを、思いだしたようすで、大声にどなりました。

「そうじゃない。まださがさないところが、一カ所だけある。きみたち、そいつの顔を、動かないように、つよくおさえていてくれたまえ。ぼくは、そいつの左の目をえぐつてやるのだ。」

小林君が、おそろしいことをいいました。

しかし、少年たちは、小林団長の命令にしたがつ

て、みんなで、たおれた明智の上ののしかかり、頭を地面におさえつけて、顔を動かさないようにしました。

「懐中電灯で顔をてらしてください。」

小林君はそういいながら、人さしゆびをグツとのぼして、いきなり、明智の左の目にちかづけました。

ああ、なんとというざんこく！ 小林君の指は、あいての左の目の中へ、グーツと、つきささっていました。そして、目の玉をくりぬいてしまったではありませんか。

「みなさん、こいつの左の目は義眼なのです。義眼がもののかくし場所になつてゐるのです。ごらんなさい、これが園田さんのダイヤです。」

小林君はそういつて、大きな宝石を、高くかざして見せました。懐中電灯の光をうけて、それは青い炎のようにもえています。

怪獣のさいご

「やつ、さては、きさま、ほんとうの小林だな。いつのまに、いれかわつたのだ。」

にせ明智は、おさえつけられたまま、わめきました。

「ハハハハハ、はじめから、いれかわつていたのさ。にせの小林は、ぼくのかわりに、地下室の牢屋にはいつているよ。ぼくが、ほんとうの明智先生をとらえる手だすけをしたのは、きみたちを、ゆだんさせるためだったのさ。」

小林君は、笑いながら、種あかしをしました。

「ちくしように、こわっぱめに、はかられたのかつ。」
にせ明智は、さもくやしそうに、つぶやきました
が、そのあとから、かれの顔に、うすきみのわるい
笑いがうかんできました。

「ウフフフフ、きみたち、それで、勝つたつもりでいるのかね。ウフフフフ、そうはいくまいぜ。こつちには、おくの手があるんだからね。」

おい、おれのはらを、おさえているぼうや、右のポケットにさわつてごらん。写真機みたいなものが、はいつているだろう。

それを、なんだと思うね。世界でいちばん小さい無電機だよ。さつきからスイッチはいれたままになつてゐるから、ここで、みんなのしゃべつたことは、すっかりニコラ博士の無電機にはいつている。

さあ、そうすると、どういふことになるだろうね。いまに、おそろしいことがおこるだろうから、用心するがいいぜ。」

ただのおどかしではなさそうです。小林君は、にせ明智のポケットから、写真機のようなものをつとりました。たしかに小型無線機のようなものです。スイッチをはずして、音がつたわらないようにして、じぶんのポケットにいれました。

「きみたち、そいつの手と足を、グルグルまきにしぼつて、身動きできないようにするんだ。みんな、ほそびきを、腰にまいてゐるだろう。それでしぼるんだ。」

小林君の命令で、十人の少年のうちの三人が、腰

のほそびきをといて、にせ明智を、げんじゆうに、しぼりあげてしまいました。

そのとき、持仏堂の入口から、ほんものの明智探偵が、はいってきました。いつのまにか、外へ出て、どこかへ行つてきたらしいのです。

「いや、感心、感心、さすがに小林君だ。よくやつた。」

明智探偵はニコニコしながら、小林少年をほめたたえるのでした。

「ウフフフ……。」

しばらく、お堂の入口にころがつている、にせの明智が、また、うすきみわるく笑いました。

「ニコラ博士は、あんがい、近くにゐるのだ。もうやつてくるじぶんだけ。どんな姿で、やつてくるか、きもをつぶさぬ用心をするがいい、ウフフフフ……。」

そのときです。お堂の外から「ウォーツ。」という、ものすごいなり声が、ひびいてきました。明智探偵と小林少年は、お堂の外に、とびだしてみました。

月がてりかがやいて、そのへんは、昼のように明るいのです。それに、広い庭には、森のように木のしげったところがあります。

その中は、月がさしこまないで、まつくらです。そのときです。チカツと金色に光るものが見えました。

そしてまた、「ウォーツ。」という、おそろしい、うなり声です。

「先生、さつき、お話した金色のトラです……。今夜は、きつと、あらわれるだろうと、思っていました。」

小林君が、そういつているうちに、黄金のトラは全身をあらわして、こちらへノソノソ歩いてきました。

人間が四つんばいになったほどの、でっかいトラです。そして、そのからだは、金色にピカピカ光っているのです。

「ウォーツ。」

こちらをむいて、大きな口をガツとひらきました。白いすごい牙きばがニユツとつきだし、口の中は

もえるように、まつかです。二つのまんまるな目はリンのように青く光っています。

さすがの明智探偵も、小林少年も、それを見ると、思わず、たちすくんでしまいました。

すると、黄金のトラは、ゆうゆうと、森の外に出てきました。月の光をあびて、全身が美しく光りかがやいています。

小林君のうしろにいた十人の少年たちは、「ワーツ。」といって、にげだしました。

トラは少年たちには目もくれず、パツとひととびで、お堂の入口にちかづきました。その速さ！まるで金色のにじが立ったように見えました。

トラはお堂の中にはいると、そこへころがされて、にせ明智のそばによって口とまえ足をつかつて、ほそびきを、ほどこうとしました。

それを見ると、明智探偵が、小林君の耳に、なにかささやきました。

小林君は、うなずいて、ポケットからピストルをとりだしました。にせ小林になりすまして、自動車の中で、明智にさしむけた、あのピストルが、まだ

ポケットにはいつていたのです。

「こらつ、やめろつ。でないと、ピストルをぶつばなすぞ。」

小林君は、まるで、あいてが人間でもあるように、どなりつけました。

すると、ふしぎなことが、おこつたのです。トラが、人間のように、まえ足を上にあげて、「かんべんしてください。」といわぬばかりに、あとじさりをはじめたではありませんか。

「あつ、せいにもせものだ。ほんとうのトラでなくて、人間がトラの皮をかぶっているのだ。みんな、こいつをやっつけてしまえ。皮をはいでしまえつ。」

小林君がさげびますと、にげだしていた少年たちが、もどつてきました。

「それつ、やつつけるんだ。」

小林君が、まっさきに、トラにとびついていきました。十人の少年たちも、四方からトラのからだに、くみつき、「エイ、エイ。」とかけ声をして、とうとう、トラをそこにたおしてしまいました。

「あつ、やつぱりそうだつ。ここにチャックがある。」

小林君が、それをグーツとひつぱりますと、トラのはらがさけて、中に人間がはいつていることがわかりました。黒いシャツをきた大きな男です。

「みんな、こいつもしばつてしまえ。」

十人の少年たちは、すっかりトラの皮をはいで、黒シャツの男を、グルグルまきに、しばつてしまいました。

トラ男は、小林君のさしむけるピストルを見て、うっかり手をあげたのが、しつぱいでした。それで人間だということがわかつてしまったのです。

そのときです。またしても、むこうの木のしげみの中から、「ウオーツ、ウオーツ。」という、おそろしいなり声が、ひびいてきました。そして、チラツ、チラツと金色のものが、見えたりかくれたりしています。

トラは一びきではなかったのです。

木の間から、二ひきの大トラが、ノソノソとあらわれてきました。

こんどは、ほんもののトラかもしれせん。ピストルをさしむけても、いつこうに、ひるむようすがないのです。

「先生、足を撃ちますよつ。」

小林君は、明智探偵に、そうさけんでおいて、ピストルを撃ちました。致命傷をあたえないように、足をねらつたのです。

みごとに命中しました。明智探偵事務所では、ピストルなんか、めつたに使いませんが、明智探偵はピストルの名手ですし、小林君も、まんいちの場合のために、ひごろ射撃の練習をしていますので、それが、こういうときに、役に立つのです。

あと足をうたれたトラは、そこところがつて、まえ足で傷口をおさえています。ほんとうのトラならば、口で傷口をなめるはずではありませんか。

「あつ、やつぱり人間だつ。そいつもしばつてしまえ。」

小林君の命令に、少年たちはゆうかんに、二ひきのトラに、とびかかつていききました。

傷つかないほうのトラも、一びきが撃たれたの

で、にげだそうか、どうしようかと、まよつていましたが、少年たちが、とびかかつてきたので、もうにげることはできません。死にもぐるいの戦いがはじまりました。

傷ついたトラも、こうなつては、じつとしているわけにいきません。いたさをこらえて、おきあがり、少年たちにむかつてきました。

こんどは、あいてが二ひきですから、少年たちは、二組にわかればならないので、なかなかの苦戦です。

二ひきの黄金の怪獣が、あちらにとび、こちらにとび、少年たちをけちらして、あばれまわり、月光にてらされた黄金のじが、縦横じゅうおうにいりみだれました。

しかし、こちらは小林少年をいれて十一人の少年探偵団員です。それに、明智探偵と園田さんも、てつだつてくれるのです。いくら強くても、ほんとうのトラではないのですから、とてもかなうものではありません。二十分ほどもかかった大格闘のすえ、トラは二ひきとも、その場に、くみふせられてしま

いました。

まだあとから、べつのトラが出てくるのではないかと、しばらくまつていましたが、そのようすもありません、トラはぜんぶで三びきしかいなかったのです。

そのときです。少年のひとりが、大きな声でさげびました。

「あつ、スーパーマンだつ！」

ニコラ博士の秘密

ああ、ごらんなさい。はれわたつた月光の空を、黒いマントをひるがえした、スーパーマンが、とんでくるのです。

これこそニコラ博士にちがいありません。博士のほかに、空をとべるやつがあろうとは思えないからです。

両手をグツと前につきだして、風をきつてとぶ

スーパーマンは、お堂の上までくると、その屋根のまわりを、グルグルと、まわりはじめました。地上五十メートルほどの高さです。ニコラ博士は、そこから、下界のようすを、見とけようとしているのです。

敵は、高い空中にいるのですから、どうすることもできません。ピストルを撃とうにも、あまり高いので、もしあいてを、ころしてしまうようなことがあつては、たいへんですから、それもできないのです。

ニコラ博士は、こちらをばかにしたように、いつまでも、お堂の上を、グルグル、グルグル、まわっていました。やがて、むこうの森のような木立ちの上へとんでいって、姿が、見えなくなっていました。

「森の中におりたのかもしれないぞ。」

少年のひとりが、大きな声でいきました。

いまに、こちらに出てくるだろうと、みんな、ゆだんなく、まちうけました。小林君はピストルをかまえることをわすれませんでした。

しかし、いくらまつても、ニコラ博士は出てくるようすがありません。どこかへ、とびさつてしまつたのでしようか。それとも、森の中におりて、なにかたくらんでいるのではないのでしょうか。

みんなはもう、まちきれなくなりました。

「森の中にはいって、ようすを見ることにしよう。」小林君は、どうとう、しびれをきらして、森の中にはいってみる決心をしました。明智探偵もいっしょにいつてくれることになりました。

少年探偵団員たちは、みんな小型の懐中電灯をもっていますので、てんでに、それをふりてらしながら、まつくらな森の中にはいっていくのです。小林団長はピストルをにぎって、先に立っています。ひとかかえも、ふたかかえもあるような、大きなヒノキなどが、たちならんでいます。

懐中電灯はたくさんあつても、みんな万年筆型の小さいのですから、たいして明るくはありません。いやにチロチロして、なんだか、そのへんに、あやしいやつがかくれているような気がします。

木のみきから、木のみきを、グルグルまわつて、

すすんでいききましたが、森のまんなかへんにきたとき、とつぜん、ガサガサという音がしたかと思うと、先に立っていた小林君の頭の上から、なにか大きなものが、サーツとおちてきました。

アツというまに、小林君は、そこにたおれていました。

「だれだつ。きさま、ニコラ博士だなつ。」

小林君は、大声にさげびましたが、ふと気がつく

と、右手ににぎっていたピストルが、ありません。

「ワハハハハ、いかにも、おれはニコラ博士だ。

小林君、きみのピストルは、いまもらつたよ。こつ

ちのは、おれのピストルだ。つまり二挺拳銃ちやうさ。き

みたちは、だれももうピストルはもつていない。こ

うなつたら、おれの命令にしたがうほかはないね。

さあ、そこをのくんだ。ニコラさまのお通りだ。」

少年たちは、みんな、あとじさりをして、道をあ

けました。コウモリのようなマントをきた、白ひげ

のニコラ博士は、ゆうゆうとその間をとおつて、森

の外に出ていきました。

それをなしたのは、むりがないとしても、名探偵明智小五郎は、いつたい、どうしたのでしよう。ふしぎなことに、そのへんに、姿が見えません。まさかにげだしてしまつたわけではないでしょう。いや、にげだすどころか、そのとき、明智探偵は、ニコラ博士に気づかれぬよう、ある場所で、ひじょうにだいじな仕事をしていたのです。

森を出たニコラ博士は、お堂の前に立っていた園田さんのそばへ、両手にピストルをかまえながら、近づいていきました。

「おい、さつき小林からうけとつた、ダイヤモンドを、おれにわたせ。おれはニコラ博士だ。いうことをきかなければ、きみの命がないぞ。」

地の底からひびいてくるような、いやな声です。

二挺のピストルをつきつけられては、命令にした

がうほかはありません。園田さんは、ポケットから

「青い炎」をとりだして、博士の前に、さしだしま

した。博士はそれをうけとつて、

「よし、よし、これでおれも、約束をはたしたわけ

だね。ワハハハハハ、じゃあ、あばよ。」

といいすて、また森の中へはいっていききました。少年たちは、まだ森の中にいましたが、だれもこの怪人にてむかうものはありません。

やがて、さつき小林君の上から、とびおりた、大きなヒノキのそばへくると、二挺のピストルを、両方のポケットにいれ、いきなり、そのみにすぎりついで、木のぼりをはじめました。まるでサルのように、木のぼりがうまいのです。たちまち、枝や葉のしげった中に、姿が見えなくなつてしまいました。

小林少年は、べつの木のみきにかくれて、そつとそのようなを見ていました。懐中電灯はつけなくても、やみに目がなれて、ぼんやりと、そのへんが見えるのです。

小林君は、いまに木の上で、どんなことがおこるかを、あらかたさつしてましたので、それをたのしみにして、まちかまえているのです。

ここで、お話は、そのヒノキの上の枝葉えだばのしげった中にうつります。

ニコラ博士は、二挺のピストルをポケットにい

れ、両手で木のみきをかかえながら、第一の横枝から、第二の横枝へと、だんだん上のほうへ、のぼつていききました。

そして、第三の横枝にのぼりついたときです。ハツと気がつくくと、両方のポケットが、かるくなつていました。

びつくりして、足でからだをささえ、両手でポケットをさぐつてみますと、ピストルがありません。二挺ともなくなつていゝのです。

ふしぎです。おとしたはずはありません。ひよつとしたら、この木にはサルかなんかがいて、ピストルを、よこどりしたのではないでしようか。

「ウフフフ、ニコラ博士、びつくりしているね。ぼくだよ、明智小五郎だよ。ピストルは、ぼくがちようだいして、下へなげおとってしまったのだよ。これで、きみもぼくも、武器がなくなつたのだから、ごかくの戦いができるというものだ。」

ああ、名探偵はここにかくれて、ニコラ博士のかえつてくるのを、まっていたのです。博士はスーパーマンのように、空をとぶためには、どうしても、

この木のてっぺんに、かえってこなければならぬわけがあつたのです。明智探偵は、そのことを、ちやんと知っていました。

明智は、さらに、ことばをつづけます。

「ぼくがどうしてこんなところにいるか、そのわけは、きみももう、さっししているだろうね。

いうまでもなく、きみの空とぶ羽根を、こわしてしまつたためさ。きみがどうして、スーパーマンのように、空をとぶか、その秘密を、ぼくは知っているのだ。数年前、あるフランス人が、人間が背中につけてとべる、ヘリコプターを小さくしたような機械を發明した。日本にたつたひとり、その機械を買い入れたやつがいる。きみはそれを使ってスーパーマンのまねをしていたのだ。夜や、うすぐらい日には、プロペラが見えないので、いかにもスーパーマンがとんでいるように思うのだ。

きみは、その機械を、この木のてっぺんにかくしておいて、ダイヤモンドをうばうために、おりにいったが、それが手にはいつたので、またプロペラを背中につけて、空へとびたつために、ここにも

どつてきた。だが、もうだめだよ。あの機械は、きみが下においているうちに、ぼくがこわしてしまつた。きみはもうとべないのだ。スーパーマンが飛行の術をうしなつてしまったのだ。」

そのとき、パツと、二つのまるい光がいれちがつて、まっくらな木の葉の中に、二つの人間の顔が、明るくてらしだされました。

明智探偵と、ニコラ博士とが、それぞれ懐中電灯をとりだして、あいての顔をてらしたのです。

怪人二十面相

名探偵とニコラ博士は、ヒノキの枝の上で、らみあいました。

「きみは、この木のてっぺんから、スーパーマンのように、とびたつつもりだつたらうが、そのとび道具のプロペラは、ぼくがこわしてしまつた。きみはもう超人の力をうしなつたのだ。」

明智が一段上の木の枝から、ニコラ博士を見おろして、とどめをさすように、いいました。

ニコラ博士は、ポケットにいれていた二挺のピストルも、さつき明智にとりあげられてしまったので、もうどうすることもできません。上の枝には明智がいるのですから、にげるなら、下におりるほかはないのです。

博士は、いきなり、木をすべりおちるように、下へにげます。明智はそのあとをおいながら、大声にさげびました。

「おい、小林君、少年探偵団の諸君。ニコラ博士は、木をおりていく。ピストルはほくがとりあげてしまったから、だいじょうぶだ。みんなで、つかまえてくれたまえ。」

すると、下にまちかまえていた小林少年が、ポケットから、呼び子の笛をとりだして、ピリピリピリ……と、ふきならしました。

それをきくと、四方ににげちつていた少年たちが、小林君のそばに、かけもどつてきました。

「ニコラ博士は、もうピストルを持っていない。み

んなで、つかまえるんだつ。」

そうさげんでいるところに、すぐ目の前のヒノキのみきを、サーツとすべりおりてくるニコラ博士の姿が見えました。

「それつ。」というので、少年たちはとびかかっていきます。

おそろしい格闘がはじまりました。ニコラ博士は、若者のような力があります。くみついていく少年たちは、かたつぱしから、投げとばされました。しかし、投げられても、投げられても、またくみついていく少年たち。こちらは小林少年をいれて十人です。いくら博士が強くても、だんだん、旗色はたいろがわるくなつてきました。

しかし、ニコラ博士にはおくの手があつたので

す。博士は、少年たちのうちで、いちばんよわそうなひとり、いきなり、うしろから、だきかかえると、

少年の首に、腕をまきつけて、のどをしめました。

「やい、こわつぱども。おれにてむかいすると、この子どもを、しめ殺してしまうぞつ。さあ、どうだ。

これでもか。」

小林君の懐中電灯が、そのありさまをてらしだしました。

つかまっている少年は、息がつまって、まっかな顔をして、目を白黒させています。このまま、ほうつておいたら殺されてしまうかもしれせん。

小林君はポケットをさぐりました。そこには二挺のピストルがはいっています。さつき、木の上から、明智探偵が投げおとしたニコラ博士のピストルを、ひろつておいたのです。

「ニコラ博士、その手をはなせつ。でない、これだぞつ。」

小林君は、右手で一挺のピストルをかまえて、左手の懐中電灯の光を、それにあててみせました。

そのとき、くらやみの中から、明智探偵の力強い声がひびいてきました。探偵もヒノキからおりて、さつきから、格闘のようすをながめていたのです。「二十面相君、きみは人殺しはしないはずだつたね。」

ふいをつかれて、ニコラ博士は、おもわず、少年

をつかまえていた手をはなしました。そして、おどろきのために、とびだすほど、見ひらいた目で、やみの中をみつめました。ニコラ博士の顔は、明智の懐中電灯でてらされていましたが、明智の姿は、やみにかくれて、すこしも見えないのです。

「ハハハハ……、とうとう白状したな。いまのようすで、きみが二十面相であることは、もうまちがいない。背中につけて、空をとぶ豆ヘリコプターを持つているのは、二十面相のほかにはない。ぼくはそれを、まえに見たことがあるので、よく知っているのだ。このヒノキのつぺんに、かくしてあったのは、それとおなじものだった。」

ぼくはさいしよから、ニコラ博士は二十面相にちがいないと思っていた。宝石や美術品ばかりねらうのは、いかにも二十面相らしいし、小林君や少年探偵団員を、ひどいめにあわせて、よろこんでいるのは、二十面相の復讐としか考えられないからね。そこへもつてきて、小林君が、にせ小林になりすまして、きみの秘密を、みんなきいてしまったのだよ。ハハハハ……、二十面相君、しばらくだったねえ。」

「ワハハハ……。」

ニコラ博士は、明智よりも、もつと大きな声で笑いとばしました。

「明智君、きみももうろくしたな。てごわいあいてにでくわすと、みんな二十面相にしてしまう。わたしはドイツ生まれの百十四歳のニコラ博士だ。人ちがいをしてもらってはこまるよ。」

そのとき、やみの中から、パツととびだしてきたものがあります。明智探偵です。探偵は、いきなり、ニコラ博士にちかづく、博士の長い白ひげと、しらがのかつらを、力まかせに、はぎとつてしまいました。その下からあらわれたのは、黒いかみの毛の、わかわかしい顔でした。

こうなつては、もう百十四歳の老人などといはることはできません。

「ハハハハ……、さすがは明智君だ。とうとうニコラ博士の魔法をやぶつてしまったねえ。だが、おれはまだまけたわけではないぜ。いつもいうように、おれはどんなときでも、さいごのおくの手が、のこしてあるのだ。」

そういつたかと思うと、ポケットから小さな写真機のようなものをとりだして、口の前に持つていきました。

「こちらニコラ。こちらニコラ。さいごの手段だつ。わかったか。よしよし、わかったね。」

それは小型の無線電話機でした。はなしかけたあいては、ニコラ博士の、れいのすみかに、るす番をしている部下のものにちがいありません。

二十面相は、にくにくしげな笑い顔で、明智探偵にむきなおりました。

「わかるかね。さいごの手段とは、なんだと思う。爆発だつ。なにもかも、こなみじんになつて、ふつとんでしまうのだ。おれの地下室の牢屋には、宝石王玉村一家のものと、白井美術店の人たちが、とじこめてある。おれに自由をあたえなければ、それらの人たちが、みな殺しになつてしまうのだ。おれは人殺しは大きらいだ。しかし、おれの自由にはかえられない。おれに人殺しをさせるのも、明智君、みんなきみのせいだぞつ。」

「アハハハ……。」

とつぜん、べつの方角から、笑い声がひびきました。小林少年です。小林君が、さもおかしそうに、笑っているのです。

「アハハハ……、二十面相君、きみは地下室においてある爆薬のたるのことをいつているのだろう。あのたるの導火線に火をつけて、みんながにげだすという、ふるくさいやりかただろう。ところが、あの爆薬は、ぼくがだめにしておいたよ。たるの中は水びたしだし、導火線は外から見たのではわからぬように、きりはなしてあるのだ。それに火をつけたつて、爆発などおこりっこないよ。アハハハハ……。」

それをきくと、二十面相は、無電機を地上に投げつけて、じだんだをふみました。

「ちくしようにめ、小林のやつ、よくもそこまで、手をまわしたなつ。おぼえている。このしかえしは、きつとしてやるからな。」

そのとき、くらやみのかなたから、懐中電灯の強い光が三つ、グングンこちらへちかづいてきました。

「明智君、中村だ。」

それは警視庁の中村警部が、数名の刑事たちをつれてやってきたのでした。

「中村君、ここだ。二十面相はここにいます。つかまえてくれたまえ。」

刑事たちが、二十面相にかけよつて、たちまち手錠をはめてしまいました。

さつき持仏堂の中で、小林君がにせ明智の義眼をくりぬいて、ダイヤモンドをとりかえたとき、ほんものの明智探偵が、しばらく、どこかに姿を消していました。そのとき、探偵は、中村警部に電話をかけて、いそいでここにきてくれるようにと、たのんだのでした。

「中村君、これからすぐに、こいつのすみかのにりこもう。二十面相もいっしょにつれていく。ぼくは警視庁の留置場にとじこめるまで、こいつのそばをはなれないつもりだ。でないと、こいつ、どんなおくの手を用意しているか、わからないからね。」

二十面相の両手に手錠をはめ、右左にひとりずつ刑事がつきそい、手錠の片方を刑事の手にもはめ

て、ぜつたいににげられないようにして、自動車にのりこみました。

二十面相は、もうかんねんしたのか、にが笑いをうかべて、だまりこんでいます。

警視庁の自動車のほかに数台のハイヤーをよんで、中村警部、その部下たち、明智探偵、手錠をはめられたにせ明智、小林少年、それから、今夜のとりもの功労者である十人の少年探偵団員もみんな自動車にのりこんで、怪人のすみかへといそぐのでした。

人間改造術

ニコラ博士のすみかにつくと、中村警部とその部下たちは、うらおもてから建物にふみこみ、そこにいた賊の手下どもを、すつかりとらえてしまいました。

それから、二十面相を、地下室の牢屋の一つにと

じこめ、見はりの刑事をつけておいて、べつの牢屋にいれられていた、玉村家と白井家の人たちをたすけだし、牢屋にのこっていた、にせの小林少年は、ひきだして、手錠をはめてしまいました。

「これで、二十面相とその部下のしまつはついたが、まだ一つだけ、のこっていることがある。それは、この地下室のいちばんおくにかくれている、一寸法師の医学者の尋問だ。まったくおなじ人間を、いくらでもつくりだす、あの医学者の秘密を、あきらかにしなければならぬ。小林君、そこに案内してくれたまえ。」

みんなは、小林少年のあとについて、部屋ぜんたいのエレベーターで地下二階におり、ロッカーのような人形箱のならんでいる廊下をとおりすぎて、あの、まぶしいほどあかるい機械室にはいっていきました。

すると、たちならぶ、めずらしい機械のおくから、まるでビックリ箱をとびだすように、あの頭をまるぼうずにした一寸法師が、ピヨコンと、姿をあらわしました。

小林少年は、ツカツカとそのそばにちかづいて、「先生、ぼくをおぼえていらっしやるでしょう？」と、声をかけました。

「おお、おぼえているとも、わしのかわいいむすじやもんなあ。」

一寸法師はニヤニヤ笑っています。

「えつ、むすこですつて？」

「おお、むすこじやとも、わしのつくった人間は、千人、万人、十万人、みんなわしのかわいいむすこじやよ。」

ところで、きみたち、おおぜいで、きようは、なにかあるのかね。あつ、そうだ。お祝いのパーティーだったね。シャンパンをぬくんだね。おーい、ボーイども、シャンパンだ。十本、二十本、いや、まだ足りない。五十本、百本、いくらでも持つてこい。そして、けいきよくポンポンぬくん。おーい、ボーイどもはいないのか。ボーイ、ボーイ……。」

こんなところにボーイなどいるはずがありません。シャンパンなどあるはずがないのです。一寸法師は、このまえ、小林君があつたときから、気が

がいめいていましたが、今夜はもつとひどいようです。

「先生、そんなことよりも、このあいだ、ぼくにもしえてくださったように、そっくりおなじ人間をつくり出す方法を、みなさんに話してあげてください。このかたは警視庁捜査課の中村警部さんです。それから、こちらは、ぼくの先生の明智探偵です。今夜はみんな、あなたのお話をききにきたのですよ。」

「おお、きみが名探偵明智小五郎君か。わしは、一度あいたいと思つていたよ。ちようどいい。さあ、シャンパンをぬいて乾杯しよう。そして、きみとodorou。バンド・マスター、うまくたのむぜ。」

そういうったかと思うと、おどろいたことには、一寸法師は、いきなり、ひとりでダンスをはじめ、機械のあいだを、あちらこちらと、はねまわるのでした。

それを見て、明智探偵は、みんなに話しかけました。

「この人は、とうとう気がちがつたようです。この

人には、まえに小林君があつたことがあるのです。そのときから、すこしおかしかつたようですが、それでも、人間改造術について、ながながと、小林君に演説してきかせたそうです。

ぼくはそれを、小林君からくわしく聞いていますから、ここで、ごくかんたんに、その術についてお話しすることにしましょう。人間の顔をかえることは、眼科や耳鼻科で、今でも、あるていどは、やっているのです。

眼科では、ひとえまぶたを、ふたえまぶたにする手術は、てがるにできます。顔を美しくしたい若い女の人などが、よくその手術をうけています。

耳鼻科では、ゾウゲやそのほかの材料を、鼻の中に入れる手術で、鼻を高くすることができます。これも、おしやれの男や女が、さかんにやつてもらっているのです。

いまはやっているのは、目と鼻の手術ぐらいですが、やろうと思えば、人間のからだは、どこでも、そういう整形手術をほどこすことができるはずです。たとえば肩のはった人を、なで肩にするのに

は、肩の骨をけずればいいのだし、あごの形をかえるのにも、やはりあごの骨をけずればいいのです。そういう手術は、わけなくできるけれども、だれもそんなものずきなまねをしないだけのことです。それから、歯を総いれ歯にすれば、そのいれ歯のつくりかたで、口やほおの形を、どんなにでもかえることができます。また、やせたほおをふっくらさせるのには、薬品をほおに注射するというやりかたもあります。かみの毛のはえぎわや、まゆの形をかえるのには、脱毛術、植毛術があり、毛の色をかえるのも、どうさないことです。

それから、コンタクトレンズを、すこし大きくつくって、義眼のように黒目の絵をかけば、黒目を大きくも小さくもできるし、目の色をかえることだってわけはないのです。

この一寸法師の医学者は、医科大学にいるところに、人間改造術ということを考えつき、だれもやらないその術のために、一生をささげようと決心したのだそうです。

そして、眼科、歯科、耳鼻科、整形外科、皮膚科

美容術と、あらゆる方面にわたって研究をつづけ、ついに人間改造術というものをつくりあげてしまったのです。ところが、ふつうの人間は、顔かたちをかえることなど、考えるものではありません。もしそういうことを考えるものがあるとすれば、それは犯罪者です。警察に追われている犯罪者ならば、じぶんの顔を、まったくちがった顔にかえたくなるでしょう。

ですから、この一寸法師のお医者さんは、しぜんと悪人ときあうようになり、さいごには、怪人二十面相の手下になってしまったのです。めざす寶石や美術品をもっている人の一家を、みんな、にせものにかえてしまうという思いきったやりかたは、おそらく二十面相が考えついたのでしょう。

まず、その人によく似た人間をさがしだして、人間改造術のふしぎを見せて、ときつけるのです。有名な宝石商や美術店の主人や家族になれるのですから、すこしでも悪い心のあるやつなら、だれもいやとはいわないでしょう。手術にとりかかるとまえば、まず、あらゆる角度からとった、ほんものの人間の

写真をあつめ、それによつて口ウ人形をつくり、ほんものをよく知っている人に見てもらつて、なおすところはなおしたうえ、いよいよ人間改造術にとりかかるのです。もともと、からだや顔のした人間に手術をほどこすのですから、できあがった人が、そつくりおなじに見えるのも、ふしぎではありません。

二十面相は美術愛好家です。ですから、さいわいにも、寶石や美術品をぬすむためだけに、人間改造術を使ったので、ひじょうに大きな害はなかったのですが、この術は、使いかたによつては、世界を一大動乱にみちびき、核戦争をおつばじめさせることだつて、できないことはないのです。たとえば、ある国の最高の地位の人や、大臣高官たちを、人間改造術によつて、悪人の手下と入れかえてしまったら、どんなことになるでしょうか。

それを一つの国だけでなく、いくつもの大国にほどこしたら、どんなことになるでしょうか。世界を一大動乱にまきこむことは、わけではないのです。核戦争は、その持ち場についている、たつたひとりの

人間の、ちよつとした思いちがいや、ボタンのおしまちがいからでも、おこりうるといいます。そうだとすれば、たつたひとりの改造人間をつくれれば、核戦争をおこし、地球上の人類を滅亡させることだってできないことではありません。考えただけでも、身ぶるいが出ます。

二十面相が、そこまでの悪人でなかったことは、なによりのことでした。さいわいなことに、この一寸法師は気がくるったようです。もう手術をする力もないかもしれせん。天ばつです。天が人間改造術などという、おそろしい罪をゆるさなかつたのです。この男は気がいいです。しかし、ねんのため、一生がい牢獄にとじこめておかなければなりません。」

明智探偵は長い話をおわって、中村警部に目であいずをしました。すると、警部はそばにいたふたりの刑事に、なにかささやきました。

ふたりの刑事はツカツカと、前にすすみました。そして、まだニヤニヤ笑っている一寸法師にちかづくくと、いきなりカチンと手錠をはめてしまいました

た。一寸法師はそれでも、べつにおどろくようすはありません。

「わしをどこへつれていくのだ。ああ、わかつた。王様の御殿につれていくのだな。そして、王様はわしに勲章くんしょうをくださるのだ。ありがたい、ありがたい。」

と、みよなたわごとを口ばしるのでした。これで超人ニコラ博士の事件はめでたくなりました。

ニコラ博士にばけていた怪人二十面相と、その手下たちはとらえられ、一寸法師の気がいい医師も刑務所に送られ、宝石王玉村さん一家、美術店白井さん一家は、ぶじすくいだされ、盗まれた宝石などは、みんな持ち主の手にかえりました。

「こんどの事件で、いちばんの働きをしたのは、小林君だな。そして、それをたすけたのは、少年探偵団の諸君だ。」

中村警部が笑いながらいきました。

「いや、日ごろの明智先生の教えがなければ、なにもできなかったでしょう。やっぱり先生のおかげですよ。」

小林少年が、けんそんしていいました。それをきくと、十人の少年探偵団員が、口をそろえてさげびました。

「明智先生、ばんざあい……。」

「小林団長、ばんざあい……。」

そして、

「少年探偵団、ばんざあい……。」

底本：「超人ニコラ／大金塊」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和 63）年 10 月 8 日第 1 刷発行

初出：「少年」光文社

1962（昭和 37）年 1 月～12 月

入力：sogo

校正：茅宮君子

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。